

令和8年3月31日 発行
國學院大學栃木短期大學紀要第60号 抜 刷

縄文土器をもとにした音楽づくりの試み（第8報） —— 春日部市郷土資料館における2021～2025年度の実践 ——

なか むら こう さく
中 村 耕 作

（本学元准教授・国立歴史民俗博物館准教授）

はや かわ ふ み こ
早 川 富美子

（本 学 教 授）

さね まつ ゆき お
實 松 幸 男

（本学兼任講師・春日部市郷土資料館長）

おに つか とも のり
鬼 塚 知 典

（春日部市郷土資料館学芸員）

たか くら ひろ みつ
高 倉 弘 光

（筑波大学附属小学校副校長）

縄文土器をもとにした音楽づくりの試み (第8報)

—— 春日部市郷土資料館における 2021 ～ 2025 年度の実践 ——

なか むら こう さく
中 村 耕 作

(本学元准教授・国立歴史民俗博物館准教授)

はや かわ ふ み こ
早 川 富美子

(本 学 教 授)

さね まつ ゆき お
實 松 幸 男

(本学兼任講師・春日部市郷土資料館長)

おに つか と も のり
鬼 塚 知 典

(春日部市郷土資料館学芸員)

たか くら ひろ みつ
高 倉 弘 光

(筑波大学附属小学校副校長)

1. プロジェクトの経緯と目的

1.1 〈縄文土器×音楽〉プロジェクトの概要

筆者らは、2016（平成 26）年度より〈縄文×音楽〉のプロジェクトとして、当時國學院大學栃木短期大学日本文化学科日本史フィールドの考古学担当であった中村（2021（令和 3）年度まで）と人間教育学科子ども教育フィールドの教員養成課程において音楽教育を担当する早川が中心となり、新たな体験学習プログラムの開発を進めてきた。その内容は、〈その地域の縄文土器の観察をもとに他の参加者と協働して創造的な音楽づくりを行う〉というものである。

近年、文化財の「活用」や、学校教育や博物館における「新たな価値」の創造が求められている。歴史・考古学資料と音楽の関わりについては、「復元楽器」をもちいて、アーティストの自己表現としての活動や、当時の音楽の再現を意識した活動が行われている。これ

に対し、本活動は一般参加者が、過去の人々が残した縄文土器に触れて得た印象を音として創造的に表現するものである。縄文土器は、当時の人々が日常的に使用した鍋であるとともに、現代的合理性から離れた形状・文様を持つ点で、現代人に大きな印象を与えるものであり、歴史資料とは別の、モノとしての価値が見出される。また、音楽という形の残らない作品という特徴は、縄文土器と参加者同士が出会ったその場限りの関係性を具現化するものとしても新たな価値をもつ活動と考えている。

このプロジェクトは、2016（平成26）年8月の小・中学生向け企画「縄文遺跡を発掘しよう！」に、早川が所属する子ども教育フィールドの学生がサポート役で関わったことにはじまる。以後、新たな体験学習プログラムの実践を繰り返してきた。このうち2020（令和2）年度から4年間は科研費（挑戦的研究（萌芽））「縄文土器文様を奏でる：考古学と音楽教育の協同による新感覚体験学習プログラムの創出」による研究として実施している。これまでに、栃木県内での小学校、中学校、高校生、兵庫県や新潟県の小学校、埼玉県の中学校や郷土資料館など、学校、博物館、遺跡、公民館での実践に広げることができた。これらの実践は、地域や所属も異なり、年代も幼児から70代の大人までと世代を超えて大きく展開することになった。

本プロジェクトの最大の特徴は、以下の3点である。

- （1）地域の実物の土器を使う（地域博物館や埋蔵文化財センター等と連携）
- （2）縄文時代に存在した自然素材を使う
- （3）協働的な学びを重視し（参加者同士のコミュニケーション）、新たな価値を創造する

まず、縄文土器は可能な限り、その地域の博物館等の協力を得て地元の遺跡で発掘された実物を使用している。次に音楽プログラムとしては、土器の形・色・模様などを手掛かりとして、縄文時代に有り得た自然素材（クルミ、クリ、ドングリ、トチノミなどの木の实とその木や葉、貝、シカ角、イノシシ骨、ヒョウタン、石（サヌカイト）等）を用いて音で表現し、音楽づくりを行うことである。参加者同士がコミュニケーションをとりながらアイデアを出し合い、グループでの音楽づくりを通して新たな価値を創造していくものである。

1.2 文化財・博物館・学校教育をめぐる社会背景

本稿では、春日部市郷土資料館において2021年度から継続している体験講座を報告する。これまでに報告してきた実践例は、小学校・中学校の授業の一環として実施してきたものであり、本稿ではまず、地域博物館における実践としての目的を検討しておく。

そもそも、本プロジェクトは遺跡体験発掘プログラムの一環としてスタートした。この活動自体は、栃木県による「とちぎ子どもの未来創造大学」事業の一環として実施したものである。この事業の目的は、「「学ぶ意欲を高め主体的に学習に取り組む態度」を身につけることを目的としています。社会教育の観点から、県内の高等教育機関・民間企業等と連携したさまざまな学習機会を子どもたちに提供することで、学校における学習だけではなく、幅広い学びを体験することができます。」とあり（<https://www.tochigi-edu.ed.jp/rainbow-net/kodomo-daigaku>）、國學院大學栃木短期大学では地域連携活動として実施した。今日、学校の授業内での実施か否かに関わらず、このような地域の様々な機関が連携して学びの場を提供することが求められている。前述のような学校との連携もそうしたものの1つである。

次に、考古学・文化財・博物館をめぐる近年の状況を確認する。以下では、発掘調査や研究の営みを「考古学」、遺跡や縄文土器などの出土品を含む過去から伝えられてきたものを「文化財」、文化財を収蔵・保存し活用する専門施設を「博物館」と呼ぶ。本稿では、特に地域に根差した文化財とそれを扱う地域博物館（郷土資料館・歴史民俗資料館等の名称を含む）を主な対象としている。

考古学では研究領域の一領域として「パブリックアーケオロジー」があり、地域（土地）に直結した遺跡とその出土品をめぐる学問と地域住民の関係が考察されてきた（松田・岡村 2012）。文化財保護法は 2019 年の改正で「文化財保存活用地域計画」の策定が盛り込まれ、保存とともに「活用」を重視する方向性が示された。また、博物館法も 2022 年の改正で、「当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光その他の活動の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとする。（第3条3）」が加わった。これらの背景には、災害や過疎化による地域文化財の保存継承が困難になりつつある現状と、観光活用への期待がある。

他方、学校教育においては、「教科等横断的な視点」「主体的・協働的な学び」「新たな価値の創造」などが重視されている。「主体的」は現行の学習指導要領、「協働的」は、「OECD ラーニングコンパス 2030」および中央教育審議会の令和3年答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」、「新たな価値」は「OECD ラーニングコンパス 2030」、小学校～高等学校の「学習指導要領解説 総則」で強調された考え方である（那須 2021、白井 2020）。『教科等横断的な視点』とは、『学習指導要領』によると、「言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成」と「現代的な諸課題に対して求められる資質・能力」の育成を目的としている。後者については、『学

習指導要領解説 総則編』の中で、「新たな価値を生み出す豊かな創造性」や「伝統や文化」「郷土や地域」が具体的に挙げられている。後2者のテーマは地域博物館の得意分野であり、前述の資料の専門性と直結する学部教育との連携とも重なる。一方、前者の「新たな価値を生み出す豊かな創造性」に関しては、日本博物館協会（2003）の提言を経て、「博物館の使命」として「新しい価値の創造」を掲げる館も多いように、博物館にとっても重要な方向性である。

1.3 本プロジェクトの目標・目的

①1期の内容と目標

本プロジェクトは、以上の動向を少しずつ学び、取り込みながら大きく3段階の変化を遂げてきた。

1期は、『土器破片を用いて、多様な文様の種類を観察し、その施文動作のリズムを感じとりながら、そのイメージを音で表現する』というものである（中根八幡遺跡学術発掘調査団 2017、早川・中村 2019a、黒子ほか 2020）。「クロスカリキュラム」の考え方にもとづいていたが、以下の目標を掲げることとした。

考古学的な目標：A：地域学習 B：歴史学習 C：異文化理解

音楽教育の目標：D：縄文時代の自然素材などを用いて、当時のことを想像しながら音を出す工夫をする

総合的な目標：今回の学び（A～C）を、自分なりに理解して、表現（D）する

A・Bは、主に小学校社会科、Dは音楽科における学習目標に準じたものであり、Cは小学校では外国語活動で取り上げられるがここに含めた（中村・早川 2019a）。

破片を用いたのは、当初、國學院大學栃木短期大学の考古学実習に伴う体験発掘の一部として、実際に土器破片を発掘し、次いで既に掘り出された土器破片の文様を拓本で写し取ることによって文様に関心を抱くというプログラムの最後に位置づけたためである。しかし、〈縄文×音楽〉音楽の部分だけを小学校で行った際に、破片ではそもそも土器とは何か、全体の形や文様構成がどのようなになっているのかなどが参加者に伝わらないという課題が指摘された。

②2期の内容と目標

そうした中で、各地の縄文遺跡を視察していた早川が展開写真の存在を知ったことから2期がスタートする。考古学における展開写真を用いた文様構造研究をふまえ、2期は、『土器全体とその展開写真を使用し、土器文様の構造と音楽の構造（音楽を形づくっている要素）

の類似を前提に、土器文様の「反復」・「強弱」・「呼びかけとこたえ」を探し出して、音の「反復」・「強弱」・「呼びかけとこたえ」として演奏で表現する》ことを目標とした。この手法は、当初小学校1～6学年の交流会で実施し、その時点で土器文様の構造はかなりの確に把握し、それを音楽で表現する試みもなされたが、音楽としての完成度に課題が残された（中村・早川 2021）。しかし、その点についても、6年生を対象とした事前の授業で準備を重ねることによって我々の目論見は達成することができた。この時に掲げた目標は以下のとおりである（中村・早川 2022a）。

（1）知識・技能

- ・縄文、弥生時代の暮らしや土器の特徴を理解する。
- ・土器文様の特徴に気づき、当時存在した自然素材を音素材として、思いや意図に合った表現をするために、「音楽を形づくっている要素」と関連させながら音楽をつくる技能を身に付ける。

（2）思考・判断・表現

- ・歴史上の事象の変化に気づき、表現する。
- ・土器文様の特徴に気づき、「音楽を形づくっている要素」である「強弱」「音の重なり」「呼びかけとこたえ」「反復」などと関連付けて考え、即興的に表現することを通して、音楽づくりの様々な発想を得る。
- ・「音楽を形づくっている要素」との関わりを踏まえ、自然素材を用いて文様をどのように表現したらよいか思いや意図をもつ。

（3）主体的に学習に取り組む態度

- ・土器文様の特徴と、「音楽を形づくっている要素」との共通性に興味・関心を持ち、当時存在した自然素材を音素材として用いて、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に音楽づくりの学習活動に取り組む。

ところが、音楽教育の専門家からは、このプログラムは土器文様の模倣に過ぎず、独創性という音楽教育の目的を果たせないとの指摘を得た。

③3期の内容と目的

3期は、この課題に対して、教科の学習目標よりも上位の目的を設定することで、その意義を明確化することとした（中村・早川 2023a）。すなわち、上記した「教科等横断的な視点」「主体的・協働的な学び」「新たな価値の創造」である。また、方法についても、土器文様と音楽の構造の結びつきを発見させることをプログラムの中で強調することは取りやめた。このため、2期で用いていた展開写真もあまり使用していない。

3期の大きな特徴は、公民館・博物館・遺跡公園での実践である。2期でも博物館所蔵資料を借用したり、学芸員に話をしてもらいなどの連携を行っていたが、3期では、生涯学習・社会教育施設が主催者となったり、会場となる実践を増やした。本稿で報告する春日部市郷土資料館もその1つである。教科教育の枠組みから脱するという意味もあったが、ここで問題となったのが、博物館の事業としての目的・目標である。学習指導要領によって全国共通で階層的に目的・目標が明示されており、評価規準も整えられている学校教育と異なり、博物館については館全体の評価については行われているものの、個々の事業については目的が明示され事後評価が行われた例はほとんどみられない。こうした現状に対し、鳥谷真佐子らは科研費（挑戦的研究（萌芽））「博物館の新たな在り方を模索するための体験学習・ワークショップ評価の構築（2018～2021年度）」においてその方法を検討した（鳥谷・阿見・野口2024）。筆者らも2020年に、これに参加して目的と評価規準の策定を試みたが、最上位の目的が2期の目標に留まっていたこともあり、十分な成果を得ることはできなかった。しかし、その必要性は意識しつづけていた。

筆者らが注目したのは、学習指導要領で導入された教科別の「見方・考え方」である。これは、具体的な知識・技能とは異なる「その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなす」と説明されている。例えば、小学校社会科では「位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」、中学校社会科歴史的分野では、「時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり事象同士を因果関係などで関連付けたりして」とある。また、小学校・中学校音楽科は「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や（社会、伝統や）文化などと関連付けること」（（）内は中学校のみ）である。では、博物館的なものの見方・考え方とはどのようなものであろうか。博物館全体を考察するのは難しいが、地域博物館として重要なのは、博物館資料＝モノと出会い、観察することをベースとすべきであろう。考古学資料の場合、小学校社会科の「比較」（中学校歴史的分野の「類似や差異」という観点も重要である。

2. 春日部市郷土資料館における実践の枠組み

2.1. 春日部市郷土資料館の概要と事業

春日部市郷土資料館は1990（平成2）年に開館した博物館施設である。複合施設である春日部市教育センター内の一施設である。郷土についての歴史、考古及び民俗に関する資

料等の収集、保存、調査及び研究を行うとともに、これらの活用を図り、市民の郷土愛と文化の向上に寄与するため設置された。地域の歴史・文化・自然などを明らかにして展示することを使命とする、地域博物館として活動している。

春日部市郷土資料館では、下記の方針に基づき事業を行っている。

- ・大宮台地と下総台地、中川低地を基盤として展開されてきた地域の風土や歴史を学ぶことのできる郷土資料館とする。
- ・春日部の歴史の変遷や生活文化に関するあらゆる資料（歴史、民俗、考古、美術、建築、芸能等）を収集・保存し、調査・研究し、展示や体験学習等による教育普及を図るものとする。
- ・地域社会における生涯学習の場とするため、全市民が参加できるような、開かれた資料館とする。
- ・学校教育とのかかわりを重視し、児童・生徒の郷土の学習に貢献するものとする。
- ・近隣地域の関連施設とのネットワーク化を図り、広く郷土の文化遺産に関する情報センターとしての役割を果たす。

具体的な事業として、展示は、常設展示のほか、企画展示を春と夏に年2回、秋から冬にかけては、小学校3年生の「むかしの暮らし」の単元に対応した地域学習展を開催している。講座関係は、しめ縄づくりやおもちゃづくりなどの体験講座、ワークショップ、古文書講座、考古学講座、各分野の講師を招きご講演いただく歴史文化講演会などを開催している。

春日部市域における縄文時代の遺跡は、今から約6,000年前をピークとする縄文海進により、春日部市域の中心部が海となり、その沿岸となる大宮台地、下総台地に、貝塚が多く残されている。海が最も入ってきた時期にあたる縄文時代前期の代表的な遺跡は、花積貝塚や町道遺跡、米島貝塚などが挙げられ、アサリやハマグリなど、海の貝で貝塚が形成されている。縄文時代後期の遺跡は、神明貝塚が挙げられる。神明貝塚は、直径約150mの範囲にドーナツ状に汽水に生息するヤマトシジミの貝殻が広がる貝塚で、令和2年3月に国史跡に指定された。

2.2. 体験講座の概要

2期の課題を克服すべく、検討を重ねる中で、上記のように博物館での実践先を探すこととなり、國學院大學栃木短期大学で博物館学の非常勤講師を依頼している實松に打診し、2021（令和3）年度に同館での開催が実現した。その後も、毎年夏休み中の8月2週目の土曜日に内容を少しずつ変えながら2025（令和7）年度までに5回の実践を行った。

春日部市には、国史跡神明貝塚をはじめとする市の歴史を特徴づける多くの縄文時代の遺跡がある。郷土資料館の常設展示も、国史跡や標式遺跡がある縄文時代に多くのスペースを配しており、入り口すぐには縄文時代中期の竪穴建物の原寸大模型が置かれ、来館者にインパクトを与えている。それら本市の遺跡を地域の文化財・歴史遺産として発信し、地域資源として活かすための一つの試みとして、縄文文化をテーマとしながら、異分野とも連携した体験的な講座を開催したいということが、館側の当初のねらいであった。それは、縄文時代や地域の遺跡や歴史に関心のあるユーザーだけではなく、多様な興味関心を持つ方々が参加しやすいメニューを開発し、多くの方々に地域の文化財・歴史遺産の魅力を伝える機会としたい、ということが根底にあったものである。

講座自体は、郷土資料館の主催、縄文×音楽プロジェクトの共催の形で開催した。また、同館が受け入れている博物館実習の1つとして実習生にも準備・片付けを含むイベント運営の実践としての参加を得た。実習生の専攻は多様である。プロジェクトメンバーである中村・早川、實松・鬼塚をはじめとする資料館職員、博物館実習生のほか、音楽づくり研究者を外部指導者として招き、毎回、プログラムに変更を加えてきた。会場は郷土資料館と同じ建物にある春日部市視聴覚教育センター視聴覚ホールであった。

参加者は当初、小学校4年生以上と保護者としたが、2023年度は3年生以上とし、他機関での実践時に小学2年生で縄文に詳しい児童もいたことから、2024年度以降は、対象年齢は問わないこととした。実際には、5歳～70歳代の参加もあった。また、2024年度末に、中村と早川は新潟県の小学校で教科横断型の授業実践を行った（中村・早川・渡辺 2025a）ことから、〈縄文×音楽〉の活動を学校教育に携わる教員にも体験をしてもらい、実践の広がりを期待すべく2025年度には、参加募集のチラシにも小学校の教員も参加を呼びかけた。

【2021（令和3）年度】

体験講座—縄文文化をもとにした音楽づくり ♪ dokidoki おんがく作り ♪

日時：令和3年8月21日（土）14時～16時30分

参加者：2家族（小学校6年生2名、保護者2名）、博物館実習生10名 計14名

指導助言：石上則子（元東京学芸大学准教授）

【2022（令和4）年度】

体験講座—縄文文化をもとにした音楽づくり ♪ dokidoki おんがく作り ♪

日時：令和4年8月7日（日）14時～16時30分

参加者：2家族（年中児1名、小学校2年生1名、4年生2名、保護者2名）、小学生単独参加（4年生4名）、博物館実習生5名 計15名

指導助言：永岡和香子（浜松学院大学短期大学部教授）

【2023（令和5）年度】

体験講座—縄文文化をもとにした音楽づくり 井みて さわって dokidoki 音楽づくり ♪

日時：令和5年8月12日（土）14時～16時30分

参加者：4家族（年中児1名、小学生2年生1名、4年生1名、5年生1名、6年生2名、保護者4名）10名、一般1名、博物館実習生6名 計17名

助言：高倉弘光（筑波大学附属小学校教諭）

サポート：國學院大學栃木短期大学生2名、越谷市内小学校教諭1名（國學院大學栃木短大卒業生）

【2024（令和6）年度】

体験講座—縄文文化をもとにした音楽づくり 井みて さわって dokidoki 音楽づくり ♪

日時：令和6年8月10日（土）14時～16時30分

参加者：4家族（2年生1名、3年生2名、5年生1名、小学校6年生1名、年長児2名（未就学児は小学生の妹）、保護者6名）、一般1名、博物館実習生3名 計17名

助言：高倉弘光（筑波大学附属小学校副校長）

【2025年（令和7）年度】

体験講座—縄文文化をもとにした音楽づくり 井みて さわって dokidoki 音楽づくり ♪

期日：令和7年8月10日（土）14時～16時30分

参加者：5家族（小学校2年生2名、3年生1名、4年生1名、5年生1名、6年生1名、年長児2名（未就学児は小学生の弟妹）、保護者5名）、教員5名、博物館実習生：5名 計23名

特別ゲスト：高倉弘光（筑波大学附属小学校副校長）

【主な流れ】

- ①導入：受付後、縄文風衣装を着用し、縄文への関心を高める。音遊びなどのアイスブレイクを入れる場合もある。
- ②縄文土器の観察：土器を観察し、形や色などの特徴や用途を考える（現代鍋との比較も行う）。班ごとに使用する土器を選ぶ。大形等尺年表で、遠い過去であることを実感した上で、展示室内の復元住居の解説を聞く。
- ③土器文様の施文体験：粘土に縄文原体、貝、ヨシなどで文様をつける。
- ④音探し：縄文時代に存在した自然素材を鳴らしてみ、どのような音が出るかを確認する。ここで音遊びのアイスブレイクを入れる場合もある。

- ⑤音楽づくり：土器を根拠（土器の形・文様、文様構成、土器から連想する縄文の暮らしなど）を発想の手掛かりとして音楽をつくる。
- ⑥発表：作品のコンセプトを紹介し、演奏。他班の解釈や演奏方法、講師の講評を共有。
- ⑦振り返り：その場で感想等を共有した後、アンケートに回答する。
- ⑧記念写真：講座終了後に、土器を持って記念撮影をする。

【音素材】

縄文時代に存在し得た自然素材として以下を用意した。サヌカイトは西日本の石器石材であるが、音高の出る素材として採用している。

豆類（アズキ、ダイズ）、エゴマ、木の実（クルミ、クリ、ドングリ、トチノミ）、木の枝・内側を削り貫いた幹（トチノキ、クリ、クヌギ、ブナ）、貝類、ヒョウタン、ヨシ（葦）、シカ角、イノシシ骨、石（サヌカイト）など

2.3. 目的・目標

以下に、2021年度と2022年度以降の目的・目標をあげておく。2021年度は、音楽の構造との関わりをまだ前面に出していた時期であり、プログラムの内容的には、前年度に行った小学校6年生を対象とする実践と大きな違いはない。但し、館としてのイベントの目的が明示されていることから示している。これに対し、2022年度以降は、前述のように3期の新たな目的の中で実施している。

【2021年度の目的・目標】

目的 縄文時代の文化や地元の文化財について学びを深め、音楽とのコラボレーションにより多角的に考え、汎用的な力（応用力）を育成する。また、児童に身近な市内遺跡について解説し、そこから出土した土器を活用することで、内陸部であるにもかかわらず多くの貝塚が存在している市域を含む埼玉東部地域の縄文時代の遺跡の特徴を、実物資料や音楽づくりを通じて体感し、身近な地域の歴史や文化財への興味・関心を高める。

目標

- （1）春日部の縄文時代や土器の特徴を理解し、当時存在したものを音素材として用いて、発想を生かした表現をするために必要な、設定した条件に基づいて、即興的に表現する。
- （2）館蔵資料をもとに縄文時代の暮らしや土器づくりを復元的に想像するとともに、土器文様を自然素材でどのように表現したらよいか思いや意図をもつ。
- （3）春日部の縄文文化・土器の特徴や、土器の特徴と「音楽を形づくっている要素」の共通性に興味・関心をもち、主体的・協働的に表現する。

【2022 年度以降の目的】

国史跡神明貝塚をはじめ、春日部市の歴史を特徴づける多くの縄文時代の遺跡について市の歴史遺産として発信し、地域資源として活かすため、縄文文化をテーマとする体験講座を開催する。本プログラムは、新しい時代に求められる子どもの資質・能力を育み、地域学習、考古学学習、音楽学習、異文化理解、協働的な学びなどの要素を含んだ横断的な教育プログラムである。

具体的には、

- ・館蔵資料を通じて地元春日部の縄文文化の特徴を理解する（＝地域学習）
- ・縄文土器の文様のつけ方や配置を読みとる（＝考古学的観察眼＝「比較」の視点）。
- ・音素材として縄文時代当時に身近に存在した木の実、骨、貝、石や枝など自然素材を用いて、当時の生活を考える（＝異文化理解）
- ・土器の文様・カタチの特徴を手掛かりに、自然素材や体の動きで音や音楽で表現する（＝音楽学習）
- ・グループ内で話し合い、1つの作品に仕上げる（＝協働的な学び）

なお、具体的目的の2点目については、2023 年度以降は、「縄文土器の文様のつけ方や、時期の違い、用途の違いを読みとる（＝考古学的観察眼）」とし、2024 年度には考古学的観察眼＝「比較」の視点、を加筆した。これは 2022 年 11 月に、近接する蓮田市の中央公民館・文化財保存館主催の実践を行った際の対応による。会場に隣接し、蓮田市の縄文文化を代表する国指定史跡黒浜貝塚は、縄文時代前期の遺跡である。これまでの実践はいずれも縄文時代中期の大きな突起をもった土器を使用してきたが、蓮田市で行う以上、前期の土器も使用すべきと考え、上記の「比較」という考え方をヒントに、前期土器と中期土器を比較することとした。この視点を 2022 年度以降の春日部での実践で採用したのである。

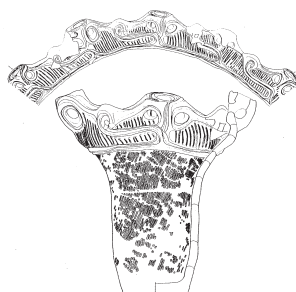
2. 4. 使用する土器

「比較」の視点は、使用する土器の選定にも影響している。2021・2022 年度は中期の土器 4 点を使用した。2023 年度は後期の土器 4 点を加えた計 8 点、2024・2025 年度はそれらから選んだ中期・後期各 2 点計 4 点を使用した。いずれも春日部市内出土である。これらの中村の考古学的視点から説明すると以下の通りである（図 1・2）。

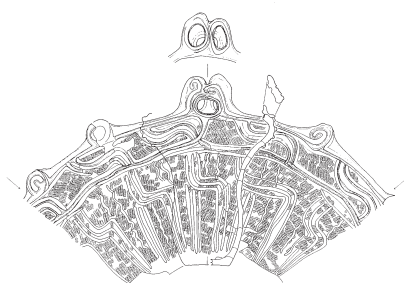
①縄文時代中期の土器（約 5000 年前）

A：坊荒句北遺跡から出土した深鉢（鍋）である。屈曲部を境に、装飾の多い上半と、縄文のみの下半（a）に分かれる。上半部は一部欠損しているものの、孔を 3 つ持つ立体

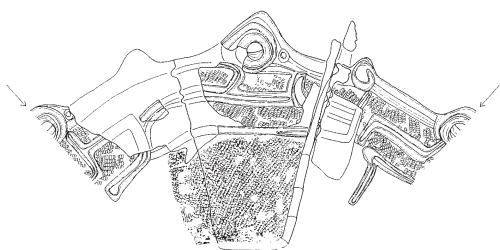
A



B



C



D

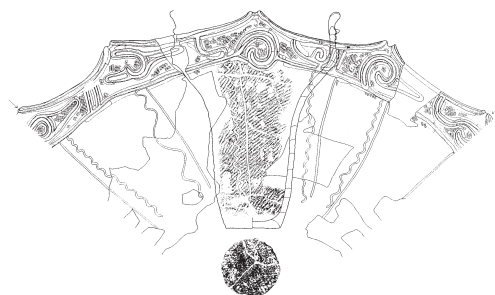


図1 使用した縄文土器（中期）

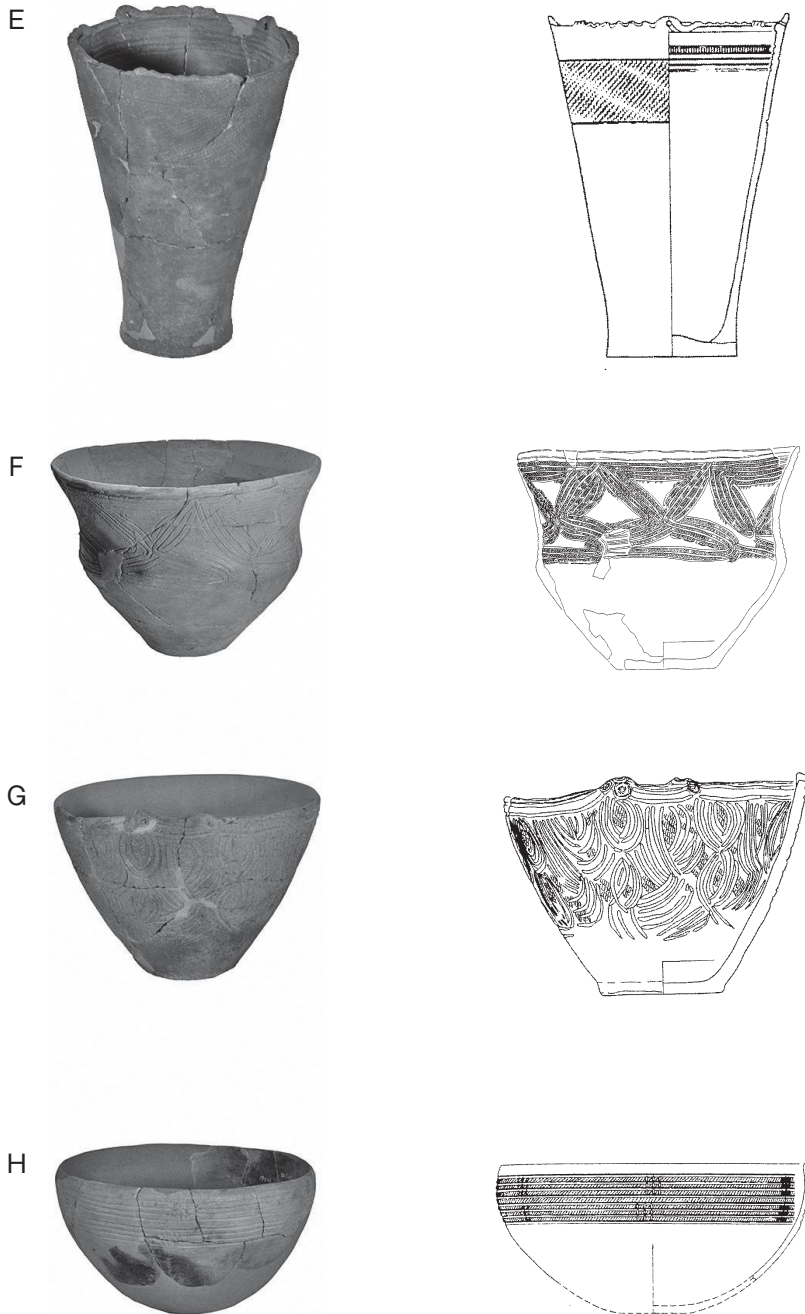


図2 使用した縄文土器（後期）

的な突起が4単位めぐっており（b）、その間に先端が渦を巻くクランク状の隆帯が配置される（c）。これらの間は縦の沈線で埋められている（d）。

B：慈恩寺原南遺跡から出土した深鉢である。やはり、上半と下半に分かれるが、下半部には縄文（a）の上から、3本の沈線によるクランク状および縦位の沈線（b）と蛇行する沈線（c）が4単位繰り返される。上半部には4つの突起があり、このうち1つは大きく内側に2つ、外側に1つ孔を持つ（d）。その他の突起にも渦巻文などがみられる（e）。これらの突起の間には、Aの土器同様にクランク状の隆帯が配置されるが、こちらでは2本1組である（f）これらの間には沈線ではなく縄文で埋められるが、この縄文は下半部のものとは向きが異なる（g）。

C：Bの土器と同じ住居跡から出土した深鉢である。A・Bと異なり、屈曲部がないが、文様の多い上半部と縄文のみの下半部（a）に分けられる。但し、この縄文は文様に先立って上半部から下半部まで連続して付けられたものである。突起は4単位で、大小が交互に配置されている。大きい突起には孔があき（b）、小さい突起には渦巻文が施される（c）。これらの間は、欠損が多く判断が難しいが、A・Bとは逆向きのクランク状の隆帯が配置されているようである（d）。

D：慈恩寺原南遺跡から出土した深鉢である。下半部は縄文（a）の上に、蛇行・直進の2つをセットとする沈線が、5単位描かれるが、図の左端の1カ所だけ蛇行と直進の左右が逆になっている（b）。上半部はなだらかに4カ所が突出しており、頂点がやや凹んでいる（c）。その下には、隆帯によって、渦巻文と三角形のモチーフが接続した単位文が配置され（d）、その間には隆帯による複数の形状の区切文（e）が置かれる（一部は単位文接続する）。

②縄文時代後期の土器（約4000年前）

後期の土器はいずれも神明貝塚からの出土品である。

E：小形の深鉢である。内外面ともに丁寧に磨かれている。外面の上方に、上下を沈線で囲まれた帯状の縄文がめぐる（a）。内面にも水平の5本の沈線を巡らせた文様帯があり、上段2本の沈線間には細かい刻みを充填する（b）。口唇部には、細かい凹凸列をもった突出部分が4カ所存在する（c）。底部には不明瞭だが敷物の圧痕が残されている（d）。

F：小形の鉢である。口縁部には2か所に僅かな突起があり（a）、2本の沈線がめぐる（b）。その下方は、全面的に縄文が施されており（c）、数本単位で)))状の文様を密に描く（d）。遺存部分は半分ほどである。

G：大形の鉢である。器形は上方が反りだしており（a）、文様はこの部分に描かれる。縄

文帯の上に沈線で、上下の水平文（b）と、その間にX状のモチーフ（c）を繰り返して描く。

H：小形の椀である。縄文帯（a）の上に、8本の水平の沈線がめぐり（b）、その上から下を縦区切文（c）で区切る。

2.5. 縄文の暮らし

講座のイントロダクションとして、子どもたちを展示室の竪穴住居復元模型の前に連れて行き、簡単な説明をしている（写真6）。春日部市郷土資料館の竪穴住居復元模型は、花積貝塚で発見された縄文時代中期の住居跡をもとにしており、父、母、子の3人のマネキンや炉の再現、獣や魚、貝などの食糧資源、石器、土器などの生活用具を設置している。

子どもたちには、特に炉の再現模型について説明し、いかに現代の生活が電気やガス、水道などライフラインにささえられ、かつ頼りきっているかに気づいてもらえるような問いかけをした。説明の後には、黙って模型を観覧し、このような生活環境でどんな音が聞こえるかを想像してもらった。

3. 縄文土器の特徴をさぐる

3.1 縄文土器との出会い

2.5で紹介した、復元住居の見学の後、実際の使用する縄文土器に出会う。会場の前に用意した机の上に並べられた縄文土器を全員で囲んで、土器の特徴を観察・確認するのである。以下に、2024年度のやりとりを再現する。アルファベット表記は参加者を示す。

中村：これ何に使ったかわかるかな？

A：米を炊く、お皿。

中村：縄文時代はお米はつくっていません。お皿は惜しい。

B：ココナッツ。

A：ドングリを煮た。

中村：そうです。ドングリに限らず、いろいろなものを似た鍋になります。（昭和の鍋を見せて）これは少し昔の鍋になります。

早川：おばあちゃん、おじいちゃんの時代の鍋です。何が違うと思う？

A：見た目。蓋がある。手持ち（把手）がある。

C：形。前のは丸いけど、縄文土器は細長い。

A：金属。



写真1 音素材の準備状況



写真2 施文体験キット・ワークシート等の準備状況



写真3 講座開始前の衣装選び



写真4 縄文土器の観察



写真5 大型年表で縄文の古さを実感



写真6 展示室内復元住居で説明をうける



写真7 観察結果を付箋に記入



写真8 文様施文体験



写真9 2021年度の図形楽譜づくり

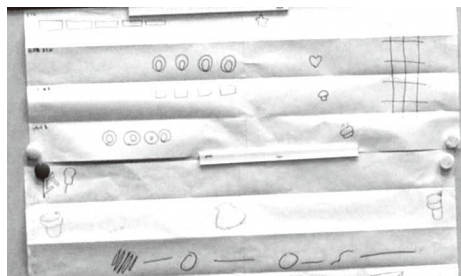


写真10 2021年度の図形楽譜



写真11 2022年度：3人組で土器を身体で表現



写真12 2022年度：年長児が手で土器を表現



写真13 2022年度：展開写真を切り抜いた図形楽譜



写真14 演奏の様子



写真15 2024年度：音楽づくり前のワークショップ



写真16 2024年度：音の出し方を試してみる

中村：縄文時代には金属はないんです。そう、土。土で作るのが土器です。

早川：触ってみてね。土でできている。今日は触っていいんです。ドキドキちゃうでしょ。

A：厚さが違う。

早川：こっちが分厚いと思う人、手を挙げて。

中村：そう、こっちが厚いです。

早川：ほかには？ 前に来てよく見て。

A：もようが違う。

C：表面が違う。

中村：そう、みんなのおうちの鍋には模様ついていますか？ ついていなくても鍋として使えますが、縄文時代の人たちは鍋に模様つけていたんです。

早川：みんな色、見てみて。

A・B・C：黒、茶色い、白い。

中村：白いところは補修したところ、表面が黒いのは葉で覆ったりして黒くしています。それとは別に、この土器の中は黒くなっていますね（内面を見せる）。中が黒いのは、焦げちゃっているんです。鍋として使われていたことがわかりますね。

3.2 土器の観察と施文体験

上記のやり取りの後、班で使用する土器を選んでもらい、各班の机に運ぶ。その際、選んだ理由を尋ねることで、土器への印象を言葉にしてもらった。さらに、各班で土器をじっくりと観察し、印象を付箋に書いてもらう（写真7）。低学年・未就学児は、保護者は学生が代理で記入することもある。文章のほか、気になった文様・造形をイラストで表現する場合もあった。

続いて、土器の文様には、工具で「沈線」を描く方法、粘土紐を張り付ける「隆帯」の方法、縄文などを使う方法があることを説明した上で、土器を見ながら、粘土上で再現しするよう促した（写真8）。各自に米粘土と葦・小さな貝殻・紙紐で作った縄文原体を用意している。縄文は、1回1回粘土に押し付けていく手法と、回転して文様をつける手法があるが、後者の手法に気づく参加者は少ない。歴史上でも後者のほうが後に出現している。

こうした作業を続けていると、独自の文様を作り出していく参加者が現れるので、それを全員に紹介し、各自で文様を作り出してもらう。

こうして、土器の形状や文様に注目してもらい、いよいよ音楽づくりへと移行していく。

4. 音楽づくり

この〈縄文×音楽〉の実践では、音楽づくりの手法に関して、これまでに多くの音楽教育研究者から指導助言をいただきながら実践を繰り返してきた。

2018年（平成30）9月及び2019年（令和元年）2月の栃木市立小野寺南小学校での実践（中村・早川 2021）、2020年（令和2）年12月における兵庫県尼崎市立下坂部小学校での実践（同 2022a）を経て、学校教育とは異なる郷土資料館での音楽づくりの活動は、どのようにしたらよいか模索をしていた。

そこで春日部市郷土資料館における2021年から2025年度の実践においても、音楽教育の研究者に助言をいただきながら取り組んできた。2021年度、2022年度の音楽づくりの方法は、郷土資料館だけで行った方法である。以下、各年度の指導助言者と方法、作品を紹介する。作品については、一部の班を抜粋し、班のメンバー構成、土器の付箋紙コメント（＊2021・2024年度は使用なし）、使用した音素材、演奏、参加者による演奏コメント（音楽づくりの発表前後の説明）と事後アンケートをもとに記述した。

4.1 2021年度の音楽づくり

2021年度は、石上則子氏（元東京学芸大学准教授）に指導助言をいただいた。石上氏は東京都の音楽専科教諭として長年音楽科教育に取り組み、東京学芸大学准教授も歴任している。音あそびや音楽づくりに関する多数の著書があり、小学校音楽科の教科書『小学生の音楽』（教育芸術社）の執筆者でもある。石上氏には、2018年9月に栃木市立小野寺南小学校で行った土器の欠片を使用した実践を見学していただき助言を受けている。2021年の講座では、事前に展開写真を使った尼崎の小学校での実践動画を視聴いただいてから、Zoomで助言をいただいた。

そのなかで、石上氏から「①子どもがいろんな角度から見て、それを楽譜に置き換えていくというのも、音楽づくりの1つのアイデアではないか。②楽器（音を出すモノ）、音の素材を一つのものに限定する、グループによって限定して異なるようにする。例えば、シャカシャカするものだけでつくとか限定も有りかもしれない。音楽づくりとして発展する、広げていくには、そのようなこともできるかもしれない」などと助言をいただいた。そして、「子どもたちが、そこから何を学んだか？何を学んでいるのか？縄文土器は文様できていて楽譜みたいにしても使える。子どもたちが自分たちで描いたもので演奏してみる。つくっていく。自分たちでつくりながら文様を描いていって、それを演奏する。表現する。そうすると、それがどういう意味をもつか？自分たちなりの音楽ができてくるかもしれない。

音楽づくりとして、広げたりする一つの方向性としてあるかもしれない」等、貴重な助言をいただくことができた。

そして、2021年度の講座は新たに絵や図を描いていくという新たな手法で取り組むことにした。

この年度はコロナ禍ということもあり、音素材は当日も消毒を施し、参加者1人ずつ素材ごとにケースに入れて配布した。音楽づくりの方法は、土器の特徴をもとにA3用紙2枚に絵や図を描いた（写真9）。それを図形楽譜（写真10）のようにし楽譜に見立てて音楽づくりを行った。当日の音楽づくりの進行は早川が行い、石上氏にはサポートをしていただいた。

班編成は、小学生家族と実習生2名で計4名の班が2つ、実習生だけの班を1つ、合計3つの班で音楽づくりを行った。以下、このうち1つの班を抜粋して、音楽づくりの内容を紹介する。

講座終了後には館内において石上氏を囲み、本稿の執筆者でもある實松館長、鬼塚学芸員、他学芸員、そして中村、早川で事後検討会を実施した。

【2021年度2班の音楽づくり】

使用した土器：土器A

班のメンバー

小学生家族（小6、保護者）2名、博物館実習生2名 合計4名

使用した音素材（アルファベット表記は参加者を示す）

A：ブナの丸太、ブナの枝、貝2枚、ヨシ2本

B：ヒョウタン、ダイズ、シカ角、イノシシ骨

C：半分に割ったヒョウタン、クリ

D：貝2枚

演奏

班で描いた図形譜（写真10）をもとに、Aがブナの丸太を2本の細いブナの木をバチにしてソロでスタートする。初めに丸太の外側を叩き次に内側を細かいリズムで刻む。それが終わるとAは、次の奏者へどうぞとブナの枝で指し示す。するとDは2枚の貝を擦り、Bはダイズを入れたヒョウタンを振り、音を出していく。次にCがクリの入ったヒョウタンを転がすようにして音を出すと、Aは机の上にセットしてある2枚の貝の上を、持ち替えたヨシで細かいリズムを叩いていく。BとDと一緒に音を出し、Cが呼応する。その間に再びAはバチをブナの枝に持ち替えて、♪♪とリズムを叩き、終わる。



参加者による音楽づくりのコメント

Bは「緑色のところ（絵）は低い音から始まって、いろいろな音が重なって、最後はまた低い音で終わるようにした」とコメントした。さらに発表後の図形楽譜の説明では、「2番目は粘土に貼り付けた文様をもとにシカ角で音出した」とコメントした。

4.2 2022年度の音楽づくり

2022年度は、永岡和香子氏（浜松学院大学短期大学部教授）に指導助言をいただいた。永岡氏は、オーストリア国立ザルツブルグ・モーツアルテウム大学大学院を修了され、オルフの音楽と動きの教育を学ばれている。本プロジェクトにおいて、土器の印象や特徴をもとに、動きを取り入れた表現ができないかと助言をいただいた。

動きを取り入れる理由として、文様をいきなり音素材（楽器）で表現するのは難しいのではないかと考え、何かイメージが浮かんだものを手や体で表現することも取り入れ、そこから次にふさわしい音素材を探してみたらどうかと考えたからである。前年2021（令和3）年度の実践では、土器の特徴や気になったものを描き、図形譜から音楽づくりをするという試みをしたが、参加者がきれいに描こうと時間を要することもあり、2022（令和4）年度は、土器の展開写真を部分的に切りとり、切り取ったものを紙に並べて貼り、最終的に楽譜替わりにした方法（写真13、14）で取り組むことを提案した。当日の進行は早川が行い、永岡氏にはサポートを依頼した。

流れのなかでは、音素材で音を出す前の活動として手や体で土器の特徴を表現した（写真11、12）が、音楽づくりの場面では活かされなかった。

2022年度は、参加者募集では対象を小学4～6年生としたが、結果的に4年生以上の小学生の参加者はなかった。班編成は、1班：小学生家族（小4・保護者）＋小学4年生の計4名、2班：小学生4年生のみ計3名、3班：小学生家族（小4・小2・幼児・保護者）計4名、4班：博物館実習生（大学3・4年生）計5名で、4班を編成した。

なお、講座終了後に館内において永岡氏を囲み、本稿の執筆者でもある実松館長、榎本学芸員、当日見学に来られていた蓮田市教育委員会生涯学習部社会教育部の横山りつ子氏、そして中村、早川で事後検討会を実施した。

【2022年度2班の音楽づくり】

使用した土器：土器C

班のメンバー

小学生（小4）3名 合計3名

土器の付箋紙コメント（各自のメモとして付箋紙記入）

- ・模様が似たような形をしている
- ・ヒビの部分が音の大きさを表しているみたい
- ・持ち手が昔の鍋はついていない
- ・波線のところ
- ・海の波みたいに奏でる
- ・上のでっぱりを音の大きさとして奏でる
- ・渦巻（図）の間隔がだいたい同じ
- ・縄文時代のお鍋は縦に長い。今のお鍋は平たい。
- ・昔の道具は手作りだけど、今は工場で作られた物が多い
- ・最初の模様が大きくて、あとの3つは小さくなっていた（図）



使用した音素材

A：サヌカイト（小）、サヌカイト（棒）、貝2枚

B：半分に割ったヒョウタンに豆類、中ヒョウタンに豆類

C：サヌカイト（中）、シカ角

演奏

Aがサヌカイト（小）を」と叩いてスタートする。するとBヒョウタンに入った豆をかき混ぜて音を出す。次にAが再び」と叩く。さらにCがサヌカイト（中）を」と叩き、その後小さい音で小刻みに叩いていく。Bが豆類の入ったヒョウタン（中）を振る。途中からAは左手に持っていた2枚の貝を重ね合わせながら音を出していく。最後はBがヒョウタンに入っている豆類を転がしながら終わる。（全51秒）

参加者による音楽づくりのコメント

この班は全員小学4年生だけの編成である。Aは作成した図形譜を指しながら、「波やギザギザした部分をサヌカイトや貝で表現した」、Bは土器の文様を指しながら、「ここらへんが波のようになっているので、波のようなことを再現してつくりました」、Cは「土器のヒビが割れたところを注目して音を出した」とコメントした。

講座後のアンケート「音楽づくりで工夫したことを教えてください」より

A：「海の波のようなかんじ。」

B：「波の所をうねうねしているところで再現したところ。」

C：「なめらかな音や高い音を工夫した。」

4.3 2023年度～2025年度の音楽づくり

2023年度は、筑波大学附属小学校教諭である高倉に指導助言を受けた。高倉は筑波大学附属小学校で永年音楽科の授業実践を行ない、特にリトミックや、音楽づくりの分野への造詣が深く、全国の教員へ指導法など発信している。また、筑波大学、群馬大学、前橋国際大学短期大学部非常勤講師、NHK教育番組などの制作および出演、文部科学省・国立教育政策研究所研究協力委員などを歴任している。また、小学校で使用する音楽科の教科書『音楽のおくりもの』（教育出版社）の執筆者でもある。当講座用に資料（参考資料1）を作成し、サポート学生・参加教員に配布した。

2023年度は、高倉の都合により講座で直接音楽づくりの指導に関わることはできなかったが、講座前に博物館実習生（大学3・4年生）を対象としたワークショップを行い、音楽づくりの進行は早川が行った。2024年度・2025年度の進行は高倉が行った。

2023年度からの音楽づくりの手法は、土器全体を観察し、その特徴や印象をもとに音楽づくりを行うことにした。

音楽づくりで使用する土器は、はじめに参加者全員が観察し、その後、気に入った土器を班に運び、さらに詳しく観察した。観察した特徴や印象などを付箋紙に記入し、班ごとに大型土器写真に貼り付け、班全体で共有した。

2023年度の班編成は1班4名、2班4名、3班5名、4班4名で、参加者の年代も未就学児から70歳代までと幅広い年齢構成となった。参加人数の関係で、4班は博物館実習生のみで編成することにした。縄文時代の中期の土器4点をAの土器、後期の土器4点をBの土器として全部で8点の土器を準備し、異なる年代の土器観察を行い、音楽づくりでは、その違いをA－Bとして音楽づくりを試みた。しかし、時間的な問題や参加者が低学年の参加者が多いこともあり、最終的にA－Bの音楽づくりを行った班は、学芸員実習生4名による1つの班のみで、他の3つの班は、中期の土器の観察をもとにした音楽づくりであった。

2024年度は、各班1個の土器のみを使うこととし、上記のうち中期と後期の各2個（A・B・E・G）の中から各班で選んでもらった。

2025年度には小学校の教員も参加を呼びかけた結果、5名の教員参加を得た。全員が音楽づくりの活動に興味関心をもち、これまでも様々な実践経験をもつ教員が参加してくれた。そこで、4つの班に1名ずつ入ってもらい、1名はフリーで各班をサポートすることになった。使用した土器は2024年度と同じである。

4.3.1～4.3.4において、2023年度～2025年度の実践で土器（A・B・E・G）を使用した音楽づくりの内容を示す。

【音楽づくり前のワークショップ】

各年度とも、土器観察・施文体験から音楽づくりに移行する際、音素材や体をつかって音を出す簡単なワークショップを行っている（写真 15、16）。本稿では、2025 年度の高倉によるワークショップの記録を作成した（参考資料 2）

高倉は、最初に様々な音素材を紹介した。（１）素材の特徴（色々な奏法のアイディア、音色、響く音と響かない音、音の高低など）、（２）音素材の扱い方（特にサヌカイト）、（３）音楽を形づくっている要素のなかでは、音楽を特徴づけている要素（音色、速さ、強弱、音の重なりなど）や音楽の仕組み（反復、呼びかけとこたえ、曲の始まり方や終わり方など）など、参加者とのやり取りの中で、音楽づくりのアイディアを盛り込みながら進行していた。音素材の紹介後には、1 人が 1 回、手や体で音を出した音を順番に回したり、真似したりすることなど、音楽づくりは誰でも安心してできることを行っていた。終始わかりやすいことばで、未就学児や低学年児童の参加者も楽しみながら積極的に参加していた。参加者のアイディアや表現を認め、賞賛しながら進行していたため、会場には笑い声が響き、温かい雰囲気が漂っていた。最後に土器の特徴をもとに、どのように音楽にしていけばよいのか、具体的な音楽づくりのヒントも提示し、各班ごとの音楽づくりへの導入となった。

4.3.1 土器 A を使用した音楽づくり

【2023 年度 3 班】

2023 年度からの音楽づくりの手法は、土器全体を観察し、その特徴や印象をもとに音楽づくりを行うことにした。

班のメンバー

小学生家族（4 年、6 年、保護者）3 名、一般 1 名、博物館実習生 2 名、合計 5 名

土器の付箋紙コメント

＊この年度は、土器 A と土器 G の 2 つの土器を観察して付箋紙に記入している。しかし、土器 G は音楽づくりには使用しておらず、土器 A のみを紹介する。

- ・粘土で焼いてきれいに残っているなんてすごい。
- ・細長い感じからだんだん太くなってきて、かわいいと思いました。
- ・面白いと思う（穴の部分を図示）
- ・丸みの上の部分や横の部分が斜めっていて、面白いです。
- ・飾りに穴があいているのがムダになっていない。穴にひもを通して歪まないように、規則的に担っている。

使用した音素材

- A：貝2枚、
- B：サヌカイト、シカ角、
- C：ヒョウタン、ヨシ
- D：ヒョウタン2、ダイズ、
- E：半分に割ったヒョウタン、ドングリ



演奏

Aが2枚の貝で4拍擦りスタートする。そしてCがヒョウタンで「（上）」（下）と叩く場所を変えて音高の違いを出し、B（小6）がサヌカイトで「」とで応える。このリズムを土台に、Aが貝を擦り、Dは2つの小さいヒョウタンをマラカスのように両手に持ち、Eは半分に割ったヒョウタンにダイズを入れたもので振り、音を重ねながら繰り返した。最後はEから抜けていき、A、C、Bで締めくくった。

参加者による音楽づくりのコメント

B：「土器の丸い部分をドングリを入れて表現したり、ヒョウタンでも丸い部分を表現したりした。サヌカイトでも丸い部分を表現した。」「Bが合図をしながらまとめた。」

【2024年度4班】

班のメンバー

小学生家族（小6・小5・保護者）3名、博物館実習生1名、合計4名

使用した音素材

- A：サヌカイト、イノシシ骨
- B：サヌカイト2
- C：サヌカイト、イノシシ骨
- D：半分に割ったヒョウタン、アズキ

演奏

音高の異なるサヌカイトを持った3人が順番にゆっくりと1回「」と叩くと、Dはアズキを入れたヒョウタンを振り応える。その速さを徐々に速くして全員でトレモロにして盛り上げて一旦締める。一呼吸おいて、サヌカイトが順番に1回ずつ叩いて繰り返す。そして徐々に速く叩いていく。最後は全員で細かくトレモロで刻み、呼吸を合わせて「」で締めくくる。

参加者による音楽づくりのコメント

D：「土器の4つの穴を3つのサヌカイトで表した。」 E：「土器の下の部分の細かな縄文の

文様をヒョウタンの中に入れたダイズでザラザラ感を表現した」(発表後の説明)

講座後のアンケート

- A:「縄のあとを表すために、アズキをゆらして音をたて、穴を表すためにサヌカイトを用いた。」
- B:「表したい部分のイメージをふくらませて部分にあうものをえらんだ。」
- C:「子供たちにはずかしさがあって、なかなか進めなかったが、先生が間に入ってくれてからは楽しそうにできたのでよかった。」
- D:「よく土器を観察した。いろいろなりズムを考えた。下の縄でかいたあとをとりいれた。」

【2025 年度 2 班】

班のメンバー

小学生家族(小4、小2、保護者1) 3名、博物館実習生1名、教員1名、合計5名

土器の付箋紙コメント

- ・そとがわは、つるつるしている
- ・中は、ざらざらしてる
- ・あながあいているところは、すこししかない
- ・つるつるしたさわりごこち
- ・まるいあながなぜあるのか(かざり? なにかやくわり?)
- ・おしゃれなもようと形
- ・上のあながあいているところは、ツルツルしている
- ・あなは、ぜんぶで4つある
- ・もようはざらざらしている
- ・きれいなまるいあな
- ・きゅっとしまった形がすてき
- ・バランスのとれた円形
- ・穴のあいている部分にもおしみなく文様がほどこされている
- ・目立つ文様が土器の上部に集中している
- ・□の4つの突出部の感覚がほとんど等しくなっている

使用した音素材

A: サヌカイト、シカ角

B: 貝2枚

C：ヨシの束

D：割ったヒョウタンにアズキ

E：サヌカイト

演奏

Cがヨシの束を手でつかみ、ヨシが擦れた音を「↓↓」と出していく。次にDがヒョウタンに入れたアズキを振り、音を重ねていく。Eが小さな音でサヌカイトで「↓↓」と音を重ね、Bが2枚の貝で擦り、Aは、ひもで吊るした大きなサヌカイトをシカ角で柔らかく叩き、音を重ねていく。次に、今度は順番に音を出すのを抜けていき、全体の音量が小さくなったところで、最後はCのヨシの束の音がかすかに聞こえる。すると、最初にDがアズキの入ったヒョウタンを振り、そのリズムを他のメンバーが真似る。次々に1人のリズムを真似て、最後はAからEまで1人ずつ順番に1拍ずつ音を出し、全員で「↓↓」で終わる。

参加者による音楽づくりのコメント

A（小4）：「土器の下から上に音を重ねていき、音を大きくした。次に上から下に下げていき真似っこして、最後は自分の音を1つずつ出して行って、最後はおしまいにした。」

B（小2）：「土器のカーブを2枚の貝を擦って音で表現した。」（発表後）

* 擦り方は土器のカーブを描くような擦り方をしていた。

4.3.2 土器Bを使用した音楽づくり

【2023年度2班】

班のメンバー：

小学生家族（2名）×2家族、演奏は4名、サポート短大生1名。

土器の付箋紙コメント

- ・あぜ道のような模様
- ・外側全体に縄などで造られたもよう
- ・全てデコボコしている。
- ・穴が3つある

使用した音素材

A：半分に割ったヒョウタンにクルミ

B：貝2枚

C：ヒョウタン2個



D：サヌカイトとイノシシ骨

演奏

サポート短大生が指揮者の役目を担った。Bが貝2枚で♪♪♪のリズムパターンを2回繰り返してスタートする。そのリズムに、Aは半分に割ったヒョウタンにクルミを入れてグルグルと回しながら音を出す。Cはヒョウタン2つを両手に持ち、♪♪♪と叩いていく。Dは1拍目にサヌカイトをイノシシ骨で叩き、音を重ねていく。このパターンを繰り返した後、Aから順に抜けていき、A B Cが抜けた後4拍の間を空けて、最後にDが♪と叩き、終了する。

演奏者のコメント

D：「土器の特徴から、でこぼこの感じをヒョウタンとクルミで表現し、あぜ道のような模様をサヌカイトでカンと叩き、あぜ道を歩いているような感じを表現した。」（発表後の説明）

【2024 年度 2 班】

班のメンバー

小学生家族（小3、年長児、保護者）、博物館実習生1名、合計4名

使用した音素材

A：ヒョウタン、ヨシ

B：貝2枚

C：半分に割ったヒョウタン、アズキ、ヨシ

D：トチノキの葉、ブナの木と枝

演奏

メンバーが異なる音素材を持ち、異なる奏法で音を出しスタートする。Aはヒョウタンをヨシで♪♪♪・・・と叩いていく。そのリズムに乗りながら、Bは2枚の貝で擦り合わせ、Cはヒョウタンにアズキを入れて、最初ヨシでグルグルとかき混ぜながら音を出し、次に素手でかき回す。Aはヒョウタンをヨシをバチにして♪♪♪のリズムを刻み、Dはトチノキの葉をバタバタと大きく振る。その後、Dはウッドブロックのように切ったブナの木を大きく1回叩く。その合図を終えると、CはAと同じように♪♪・・・とヒョウタンをヨシで叩いていく。Dは、再びトチノキの葉に持ち替える。Aが♪♪と8回叩くと休止し、Bがグルグル貝を擦り、Cがヒョウタンに入ったアズキをヨシでグルグルとかき回す。Dはトチノミの葉をバタバタと振り音を出し、ソロ回しをする。それが終わると、A B Cが音を出し、Dがブナの木に持ち替えて1回大きく叩き、終了する。

参加者コメント

この家族は、2023 年度に続き 2 回目の参加である。使用した土器は昨年度とは異なる。子どもたちが主体的に取り組んでいた。演奏後に土器のどの部分を演奏していたかと問うと、C（年長児）は「土器の縄の文様」、D（小3）は「トチの木で土器の大きな把手の特徴を表現した」と発表した。

講座後のアンケート

- A：「大きな穴も含めてツノが4つあったことを利用して、4拍子で拍を取りました。また、最後に穴を表す音を出す際に楽器を替えるところがあったので、タイミングがわかりやすいように目くばせをしました。」
- B：「（葉）柔らかい音と（木の棒）強い音を表現しました。」
- C：「いろんなおとをくふうした。」
- D：「木と葉っぱをつかうタイミング」

【2025 年度 1 班】

班のメンバー

小学生家族（年長児、小2、保護者）3名、博物館学芸員実習生1名、教員1名、合計5名

土器の付箋紙コメント

- ・あつみがある
- ・くるん
- ・でこぼこがある
- ・ざらざら
- ・だんだんとすぼんでいく
- ・まるいもよう
- ・下のほうのまるみ
- ・どっしりした形
- ・もようがびっしり
- ・ちゃいろがいい
- ・うすいところとくろっぽいところ、まだら
- ・もようのでっぱり
- ・おしゃれ
- ・中のこい色

使用した音素材

A：クルミ 2 個

B：サヌカイト、シカ角

C：ヒョウタン、ダイズ

D：貝 2 枚

E：ヒョウタン、ヨシ

演奏

B がサヌカイトをシカ角で 1 回叩いてスタートする。C がヒョウタンをシャシャシャと 3 回振り応える。B がまたサヌカイトを 1 回叩き、D が 2 枚の貝をシャシャと 2 回擦って応える。B がサヌカイトを 1 回叩き、E がヨシでヒョウタンをタタタと 3 回叩いて答える。次に C がシャシャシャを繰り返し、そのリズムの上に D が貝をグルグルと擦り軽快なリズムを重ね、6 拍後に D がタンタンタンと音を重ねていく。さらに B が A の代わりに 2 個のクルミを合わせてタンタンタンと音を重ねながら繰り返していく。やがて繰り返しの音がだんだんと小さくなり、最後は A がソロで「♪♪♪♪♪♪」と叩き終わる。

参加者コメント

発表後、高倉から C（小 2）に 2 つの質問をした。最初にシャシャシャと表現したのはどの部分かの質問に対して、C は土器を指差し、「丸みの部分」と答え、最後にだんだん音が小さくなったのはどの部分かの問いに対しては、「下のしぼんでいる部分」と答えた。

アンケートの記述から

C：「丸みの部分を道具を使って表しました。下の方に向かって細くなったところを音も小さくして細いところを表しました。」E：「すぼんでいく形を表す為に、終わりにつれて小さくなるようにした。土器が分厚かったので音に重みが出るようにしました。」

4.3.3 土器 E を使用した音楽づくり

【2024 年度 3 班】

班のメンバー

小学生家族（小 2、祖母、保護者）3 名、一般 1 名、博物館実習生 1 名、合計 5 名

使用した音素材

A：ヒョウタン、イノシシ骨 2 本

B：葉のついたトチノキの枝

C：クルミ 2 個

D：シカ角2本

E：半分に割ったヒョウタン、アズキ

演奏

Aがイノシシ骨でヒョウタンを「↓↓」と3拍叩き、4拍目は2本のイノシシ骨を叩き合わせる。そして次の演奏者をイノシシ骨で指す。Aはこの4拍のリズムパターンを繰り返す、そのリズムに乗ってE、D、C、Bと順番にソロ回しを行っていく。Bは2本のシカ角を擦り合わせ、Cもクルミを擦り合わせ、Bはトチノキの葉を大きく揺らして音を出す。2週目も順番にソロ回しをしたが、Dが4拍目にEの持っているヒョウタンの底をシカ角で叩いてインパクトを強くして表現した。

参加者による音楽づくりのコメント

Eによれば、「土器に4つの穴があいていたので、4拍子にこだわった。」（発表後）

講座後のアンケート

A：「シンプルに、基本の4／4拍で。」

B：「なんでも音が工夫によって楽しく遊べる発見ができました。」

C：「楽しく表せる様に」

E：「なるべくまめとかをおとさないように、あともう一つは4びょうしにしようとおもいました。」

【2025年度5班】

班のメンバー

小学生家族（小6、保護者）2名、博物館実習生2名、教員1名、合計5名

土器の付箋紙コメント

- ・五線に「↓」とプレス、アルペジオが（図）
- ・シャッ、シャッ（図）
- ・ゴロゴロ（図）
- ・中にも模様がある
- ・外側の模様が一部分しかない
- ・底に角ばった模様
- ・底にも模様がある
- ・中はつるつるで外はざらざら！！
- ・上にいくにつれて外は広い



- ・色が黒っぽい
- ・中にまだもようがキレイにかかっている
- ・外より中の方がツルツルしている。中の線が同じ幅で引いてある。
- ・他の土器より色が濃い
- ・色と模様で触り心地がちがう
- ・穴が空いた突きがある。

使用した音素材

A：サヌカイト 2、ヒョウタン、イノシシ骨 2

B：クルミ 4

C：ヒョウタン、ヨシ

D：シカ角、ヨシ

E：貝 2 枚

演奏

E から 4 拍ずつ順番にそれぞれの音素材で音を出して音を重ねていく。E は 2 枚の貝でシャシャと擦り、D はシカ角をヨシで擦る。C はヒョウタンをヨシで擦り、B はクルミを手の平のなかで擦る。A は音高の異なる 2 つのサヌカイトを 2 本のイノシシ骨でリズムを刻んでいく。最初は P の弱い音で始まり、8 拍の間に強くしていった。次の場面で A と B が小さいな音で 4 拍音素材を擦り、A の合図で全員がロールの奏法で細かく 8 拍強く叩き、最後は全員で J と叩いて終えた。

参加者による演奏コメント

E は土器のザラザラ感、D はシャラシャラ、模様から A は土器の内側に五線が見えたため、2 つの音高の異なるサヌカイトを使ってメロディーのように表現した。(発表後)

講座後のアンケート

A：「鳴らし方（こする、打つ、振る）の違い、音量の変化と創る工夫をした。」

B：「くるみを 4 個もって、こすり合わせながら音を出した。ゴロゴロとした荒れている様子を葉で表現した。」

C：「丸いヒョウタンをかかえて、ヨシを細かく動かしました。」

D：「貝→ガザガザ、サヌカイト→カンカン、シカ角→ザラザラ（写真に矢印で示す）」

E：「貝→ザラザラ、サヌカイト→ツルツル、シカ角→ザラザラ（シャーシャー）、ヒョウタン→ザラザラ（写真に矢印有）」

4.3.4 土器Gを使用した音楽づくり

【2024 年度 1 班】

班のメンバー

小学生家族（未就学児 1、小 3、保護者 2） 4 名、合計 4 名

使用した音素材

A：半分に割れたヒョウタン、小さいヒョウタン

B：貝 2 枚

C：ブナの木と枝 2 本

D：ヒョウタン、ヨシ

演奏

A は半分に割れたヒョウタンの内側を小さいヒョウタンで擦り、B は 2 枚の貝をグルグルと合わせて擦り、D はヒョウタンをブナの枝でグルグルと擦り、ポンと枝で叩く。C は、2 本のブナの枝で小さなブナの丸太をポンだけを叩く。グルグルとポンの掛け合いによる表現を繰り返した。最後はグルグル、ポンポンポンで終了した。

参加者による音楽づくりのコメント

B と D は、土器のグルグルした模様とその中にある模様を差して、それがいくつもあるから繰り返したとのこと。（発表後）

講座後のアンケート

A：「模様から丸い絵をみて「ぐるぐるポン」という言葉をリズムにしてみました。」

B：「どんぐりの木と木の棒に貝殻とヒョウタンを使った。音楽ができてうれしいです。」

C：「木の枝、1 本ではなく 2 本にして音が響くようにしました。」

D：「ぐるぐるぼん」

【2025 年度 3 班】

班のメンバー

小学生家族（小 3、年長児、保護者 1） 3 名、小学生家族（小 4、保護者 1） 2 名、学芸員実習生 1 名、教員 1 名、合計 7 名

土器の付箋紙コメント

- ・イヤリングの模様みたい
- ・ザラザラした感じ
- ・ぼこぼこ（図）穴



- ・葉っぱ？おはな？（図）
- ・もようの形がだいたいいいしょ
- ・ざらざら
- ・何重にもなった輪
- ・下に模様がない（図）
- ・上のほうが線二重になっていておもしろい
- ・模様がおもしろい
- ・さわった感じがざらざらしていいとおもしろい
- ・2か所でっぱりがある（図）
- ・さらさらがおもしろかった
- ・ぎざぎざとつるつるがおもしろい
- ・われたところがおもしろかった

使用した音素材

- A：クルミ
- B：ヒョウタン、シカ角
- C：ヒョウタン、アズキ
- D：サヌカイト、イノシシ骨
- E：貝2枚
- F：半分に割ったヒョウタン、ダイズ
- G：半分に割ったヒョウタン、クリ

演奏

ザラザラチームとボコボコチームの2つに分かれて、各音素材で表現してスタートした。最初にザラザラチームが音素材をかき回しながら音を出し、ボコボコチームが音を重ねていく。その後、Cの合図で全員が「」と3回叩くようにして前半が終わる。次に、GからAまで1人ずつ順番に音を出してつなげていく。Aまでつなげたら、今度はAから反対回りに1人ずつ音を重ねていき、最後に全員で息を合わせて「」で終わる。

参加者による音楽づくりのコメント

Gは土器写真を差しながら、「土器の模様から、ザラザラとボコボコを表現した。」（発表後の説明）

講座後のアンケート

- ・ザラザラ感を表すために、ひょうたんの中に豆を入れて揺すった。

- ・ サヌカイト→ボコボコ→ザラザラ→一人ずつ→一人ずつ重ねる→終わりの構成
- ・ 擦る強さや動きで音の感じが変わるので強さを調整しました。（ヒョウタンと貝がら）
- ・ 私はヒョウタンにクルミを入れました。最初にもんで音を出し、おとしながら最後に合わせました。
- ・ みんなの楽器を合わせて工夫した。
- ・ 大きくはっきり聞こえるように。

4. 4 縄文土器と音楽づくり

小学校の音楽科には、歌唱や器楽、鑑賞と並んで「音楽づくり」（創作）という学習内容がある。学習における音楽づくりとは、楽譜も何もないところから、音楽をつくり上げることがを意味するが、小学生にとってまとまりのある音楽をつくることは困難と言わざるを得ない。音楽をリズム、メロディ、ハーモニーの要素に分けて論じることがあるが、小学生にとってメロディやハーモニーを伴う音楽を授業内でつくることには困難が伴うのである。

しかし、リズムだけの音楽ならば、低学年であっても短い簡単なリズムをモチーフにして、それを繰り返したり、AとBのモチーフを掛け合いのようにして演奏したり、あるいはAとB、あるいはCのモチーフを重ねたりすることでまとまりのある音楽にすることができるのである。

今回の講座は、縄文土器をもとにして音楽をつくるという企画であった。春日部で発掘されたいくつかの縄文土器を注意深く観察すると、音楽のもととなるモチーフを想起させる文様があることに気付く。例えば、土器の側面に見られる線に着目すると、短い直線がきれいに並んでいる部分がある。それは直線の「反復」を意味する。反復は、古来より音楽をつくる際の最も一般的な技法の一つである。反復という視点をもって見れば、土器Aには紐を通して吊るすことができるような小さな穴が、土器のふちに4箇所認められた。土器の真上から見ると土器のふちは円形であり、その円周の4箇所に均等に小さな穴の空いた突起があるのだ。これもまたきれいに並んだ反復と見ることができる。

また、土器Eは、その上部に数センチメートルの楕円の穴が空いている文様が存在し、それが円周に5箇所くらい、まるで波を打つように並んでいる。これを音に表すと音を強弱させながらモチーフを反復させることに置き換えられそうである。

このように考えると、縄文土器には音楽をつくる際のモチーフ、部品が散りばめられていると捉えることができる。

実際に、講座で音楽をつくった人たちのアンケートをみると、小学2年生のコメントに「土

器のカーブを2枚の貝を擦って音で表現した」とか、小学4年生は「土器の下から上に音を重ねていき、音を大きくした。次に上から下に下げていき、真似っこして、最後は、自分の音の一つずつ出して行って、最後はおしまいにした」とあった。別のグループでは、「模様から丸い絵を見て『ぐるぐるボン』という言葉のリズムにしてみました」というコメントがみられた。

これらのコメントからも、小学生が縄文土器の形状や文様から音楽づくりの着想を得て実際に音に、そしてそれらを組織化して音楽にしている様子がわかる。

小学校の音楽科の教科書に目を通してみると、音楽のモチーフとなるものを何らかの模様(文様)にしているものはきわめて少ない。本講座における試みは、音楽科の学習においても参考になると考えられる。

5. 評価

本稿では、2016年度から実施している〈縄文×音楽〉プロジェクトの中でも、5年間継続して実施している春日部市郷土資料館での講座の実践記録をまとめた。この間、他の期間での実践などもふまえて毎回プログラムを改善してきたため、煩瑣な記述となったが、一連の試行錯誤の記録として提示した。

プロジェクト全体で掲げている目的に対する成果の評価方法や博物館教育・学校教育における意義の評価方法については依然として課題となっているが、本稿では特記すべき参加者の反応と、小学校教員と博物館からのコメントという形で評価を提示する方法をとった。

5.1 参加者の反応

本講座では講座後にアンケートを実施している。その具体的内容は年度ごとに異なるが、概ね縄文土器のどのような箇所に注目し、どのような感想を持ったか、それをどのような音素材をどのように工夫して演奏したか、楽しかった・難しかったのはどのような点か、本講座をどこで知ったのか、などの内容である。このうち、縄文土器および音楽づくりに関する部分の目標である地域学習、考古学的観察眼、比較の視点、異文化理解、音楽学習については、これまでの実践でも一定の成果が得られていることを確認しており、春日部での一連の講座でも同様である。

これに対し、協働性については、これまでの中学生に対する実践時のアンケート記述などの分析からは、成果を読み取ることができたが、本講座のような低学年以下が主体となる場合、記述からの分析は困難である。2025年度において、楽しかったことを尋ねる選択

肢（重複回答可）で挙げた「みんなで、いろいろなもので、かんたんな音楽をつくったこと」に13名が選択していたとしても、協働的な学びを得たと判断するのは難しい。従って、定量的な分析は行わないが、具体的事例として4.3.1で取り上げた2023年度の3班は、小学生の姉弟2人だけの参加に、一般1名、実習生2名と編成であった。この年のアンケートでは「楽しかったことは何ですか」の問いに記述式で答えてもらったが、「みんなで協力したところ」「音楽づくりで協力しあったこと」「初めての人達と1つの事に結果を出す事は楽しい」「みんなで音楽を合わせたこと」「皆で合奏できたこと」と5名全員が記入していた。このような事例からは、小学生、大学生、70代の一般参加者と年代を超えて、土器を介した音楽づくりによって協働的な学びがあったと考察できる。

博物館の講座においては、こうした当日のアンケート以外に、その後の効果を追跡調査することは困難である。そうした中、1つの指標となるのが、リピーターである。本講座では2023年度・2024年度に1組の家族が連続して参加している。2023年度には小学2年生の絵日記で本講座を取り上げてくれている。文章には、土器を見学したこと、各音素材の名前とそれを用いて音楽をつくったこと、縄文時代の暮らしや土器の作り方を勉強したことが記され、土器と音素材が描かれている。保護者のコメントによれば、夏休みの宿題の絵日記に家族旅行ではなく、この講座の方を選んで書いたという。

5.2 小学校教員としてのコメント

本講座は、「縄文土器と音楽づくり」という、関係性でいうとかなり距離のある2つの要素で構成されている。その距離のある2つの要素を結びつけたものはなんだったのだろうか。また講座を通してみられた価値はなんだったのだろうか。以下に考察を試みる。

一つは、先にも述べたことだが、縄文土器の全体や部分の形状やそこに刻まれている文様それ自体が、音楽のモチーフや仕組みを表していることである。直線がある一つの音を意味し、それが何本も集まれば音の反復につながる。また丸い穴の形状と直線が二つのモチーフを意味し、それを交互に音として表せば、掛け合いのリズムが生まれる。

縄文土器と音楽づくりには親和性があると捉えることができ、本ワークショップの意義に挙げられる。縄文土器にも、また音楽づくりにも、相互に新しい価値を見出すことができたことと捉えることができるのではないだろうか。

意義はまだ存在する。ワークショップでは、同一の土器をもとにして、グループによって異なる音楽が生まれる現象が認められた。ある土器からどのような音楽をつくるべきか、その正解はない。正解のないものへの挑戦は、正解のない時代と言われる現代において意

義深い行為であると見ることはできないだろうか。また同時に、この挑戦は多様性の尊重の実現と見ることもできないだろうか。このような挑戦を通して、正解のない時代、次代を生き抜く人を育てることにもつながるのではないだろうか。

そしてもう一つ、意義を挙げたい。縄文土器から音楽をつくる際は、グループでの作業となったが、グループの成員はその日初めて出会った人たちであったり、世代の異なる家族であったりした。大袈裟な言い方をすれば、異なる文化、価値観をもった人々がグループを成し、それら異なる文化、価値観をぶつけ合いながら一つの価値をつくりあげた。ここに生まれた協働性にも大きな意義を認められた。

以上、本講座からみえた意義について小学校教師の視点で考えた。

5.3 地域博物館の立場からのコメント（春日部市郷土資料館のコメント）

郷土資料館では、地域博物館としての立場から、本市の遺跡を地域の文化財・歴史遺産として発信し、地域資源として活かすための異分野連携の試みとして、本講座に共催し、実施した。「2. 春日部市郷土資料館における実践の枠組み」において先述したとおり、縄文時代や地域の遺跡・歴史に関心のあるユーザーだけではなく、多様な興味関心を持つ方々が参加しやすいメニューを開発し、多くの方々に地域の文化財・歴史遺産の魅力を伝える機会としたかったからである。また博物館における学びの観点からすると、博物館での体験をファクターとした参加者・来館者・利用者による主体的な学び、多様な学びの機会とすることも重要であり、縄文音楽講座は参加者にとってそのような体験の場となり得る魅力的なメニューとなる可能性を秘めている。以下、地域博物館としてのねらいと、博物館の学びの観点から、コメントする。

参加者にとっては、縄文音楽講座によって身近な場所に遺跡があり、実物の土器や石器が出土しているということを知るインパクトは大きい。これらは、春日部市で別に開催している土器作り講座などにも共通にみられるものであるが、実物－数千年前に地域に暮らしていた人々が作って、使用したモノ（道具）－についての純粋な感動や驚きと、実物を利用してワークショップを実践すること自体が、参加者の体験・経験に強い印象を与える。そこから導き出され、深められていく参加者自身の興味や関心は、市内の遺跡についてであったり、縄文時代の環境や生活であったり、土器や石器の形や製法であったり、道具の使い方やその起源についてであったりと、実に多様なものである。考古学や地域史の観点だけではなく、器形や文様に対する美術やデザインなど芸術的な関心を持つ場合もあり、各自が得られる知見は参加者の個性によって多様なものとなる。

もちろん、音楽教育の観点からの本講座のねらいの一つである音楽的なインスピレーションにもつながるものである。博物館にとって異分野との連携の意義はこの点にあり、従来の土器作り講座などの体験講座では受講者が気づきにくいと思われる音楽の創作について、本講座のような実践は受講者を導いていくことが可能となる。縄文時代の生活具や食材（木の実や骨・貝殻）を使って音楽を創造していくことは、土器の器形や文様を基にした単純な模倣による音楽制作などではなく、実物を通じた創造性の源としてのファーストコンタクトという位置づけができるのではないか。

上記のことは、過去5回の講座のいずれでも、参加の児童と保護者の方の様子や、指導者・主催者との参加者との会話、感想、アンケートの端々から感じたことであった。博物館側の講座の目的は達せられることが確認され、音楽創作について博物館としてのメニュー化については試行錯誤の途上といったところであろうか。郷土資料館内や史跡・遺跡などの場における講座・イベントのメニューの一つとして、今後も開発を目指したいと考えているところである。

最後に、これまでの縄文音楽講座についての具体的な振り返りを記しておく。令和6年度に國學院大學栃木短期大学で実施した検討会での発表では、縄文音楽講座の令和5年度までの3回の成果を振り返り、意義として、新たな利用者層の開拓、土器に触れる機会を作ることができる、土器の文様をじっくり見ることができる、文様のつけ方を学ぶことができる、土器の文様はくり返しであるということに気づく、くり返しの中にも他と違う部分もあることに気づく、音楽で表現するということをつうじて、音楽もくり返しであるということに気づくなどの点を挙げた。一方、課題として、講座の趣旨が伝わりづらく、参加者を集めることが難しい、「音楽」としているが、メロディがない、参加者に音楽づくりの経験がない、講座を受けた後に、持ち帰ることができるものがない、夏休み開催なので自由研究につなげたい、講座の趣旨を明確に見出し、継続して実施できる事業としたいといった点を挙げた。

これらのうち「持ち帰ることができるものがない」という点については、令和6年度、7年度では、ワークシートを用意し、縄文土器に触った印象や注目した点、音楽や体の動きを表すための工夫などを参加者に記入してもらい、開催者側でコピーをとった上で、持ち帰ってもらった。低学年は、記入がやや難しかった印象だが、高学年や博物館実習生、保護者は、細かく記入している方が多かった。

執筆分担 中村：1、2.2～2.4、3 實松・鬼塚：2.1、2.5、5.3 早川：4.1～4.3 高倉：4.4、5.2

付記

本研究は、対象者には書面及び口頭で内容を説明したうえで署名による同意を得た。

これまでの実践報告・口頭発表・ポスター発表等

- 中根八幡遺跡学術発掘調査団 2017「栃木県栃木市中根八幡遺跡第2次発掘調査概要報告」『文化財学報』第35集（早川富美子「縄文土器の破片をもとにした「音楽づくり」」）※第1報
- 早川富美子・中村耕作 2019a「発掘した縄文土器をもとにした音楽活動の試みークロスカリキュラムの視点からー」『國學院大學栃木短期大學紀要』第53号 ※第2報
- 中村耕作・早川富美子 2019b「考古学と音楽教育の連携ー中根八幡遺跡の縄文土器と音楽づくりー」考古学研究会第65回総会・研究集会（ポスターセッション）2019年4月20日（岡山大学）
- 早川富美子・中村耕作 2019c「考古学と音楽教育の連携ー縄文文化をもとにした音楽づくりの試みー」日本音楽教育学会第50回大会（ポスター発表）2019年10月19日（東京藝術大学）
- 黒子美和子・早川富美子・中村耕作・小野沢美明子 2020「縄文文化をもとに音楽をつくろう」『音楽の授業づくりジャーナル』第3号 ※第3報
- 中村耕作・早川富美子 2021「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第4報）ー小学校全学年「表現活動交流会」の実践からー」『國學院大學栃木短期大學紀要』第55号
- 中村耕作・早川富美子 2022a「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第5報）ー小学校6年生音楽科授業における実践と課題ー」『國學院大學栃木短期大學紀要』第56号
- 中村耕作・早川富美子 2022b「考古学と音楽教育の連携3ー主体的・協働的な学びにむけてー」2022年度考古学研究会ポスター発表（オンライン）2022年4月23日～5月31日
- 中村耕作・早川富美子 2022c「博物館資料をもとにした創作の可能性ー〈縄文土器×音楽〉を通じた「協働的な学び」に向けてー」全日本博物館学会第48回研究大会 2022年6月26日（國學院大學）
- 中村耕作 2022d「縄文土器を手掛かりとした音楽づくり」第2回CMM研究会 2022年7月23日（文教大学）
- 中村耕作・早川富美子 2022e「博物館資料（縄文土器）を用いた音楽づくりの試みー考古学と音楽教育の連携2ー」第53回日本音楽教育学会 2022年11月5日（オンライン）
- 中村耕作・早川富美子 2023a「縄文土器文様をもとにした音楽づくりの試み（第6報）ー中学校3年生総合的な学習の時間における実践と課題ー」『國學院大學栃木短期大學紀要』第57号
- 中村耕作・早川富美子・實松幸男・鬼塚知典・鈴木廣志・永田陽一・横山りつ子・小林美穂・永岡和香子・近藤真子・石井ゆきこ 2023b「新しい価値の創出を目指した縄文土器を用いた協働的な音楽づくりの試み」日本考古学協会第89回総会研究発表（ポスターセッション）2023年5月28日（東海大学）
- 早川富美子・中村耕作 2023c「考古学と音楽教育の連携3 縄文土器をもとにした音楽づくりを中心とした教科等横断型授業の試み」日本音楽教育学会第54回大会（ポスター発表）2023年10月14日（弘前大学）
- 中村耕作・早川富美子・渡辺ゆみ子 2024a「考古学と音楽教育の連携3 縄文土器をもとにした音楽づくりを中心とした教科等横断型授業の試み」考古学研究会第70回総会・研究集会ポスターセッション 2024年5月26日（岡山大学）※本来は4だが誤って3とした

- 中村耕作 2024b 「縄文土器から音楽をつくる」第5回 Online Art & Archaeology Forum 2024年5月6日（オンライン）
- 早川富美子・中村耕作・渡辺ゆみ子 2024c 「考古学と音楽教育の連携4—社会科・音楽科・家庭科・体育科との教科横断型授業実践の試み」日本音楽教育学会第55回大会 2024年10月19日（玉川大学）
- 中村耕作・早川富美子・渡辺ゆみ子 2025a 「津南町の縄文土器をもとにした子どもたちの音楽づくり」『津南学』13
- 早川富美子・中村耕作 2025b 「縄文土器をもとにした音楽づくりの試み（第7報）—國學院大學栃木短期大学子ども教育フィールドの取り組み—」『國學院大學栃木短期大學紀要』第59号
- Fumiko Hayakawa, Kousaku Nakamura, Yumiko Watanabe 2025c Creative music-making and its possibilities based on Jomon pottery through the collaboration of archaeology and music education : Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (APSMER) ポスター発表 2025年7月10日 Edith Cowan University (ECU), Perth, Western Australia.
- 中村耕作・早川富美子・渡辺ゆみ子 2025d 「火焰型土器を用いた音楽づくりほか教科等横断型授業の試み」日本考古学協会 2025年度新潟大会（ポスターセッション）2025年10月26日（新潟医療福祉大学）

参考文献

- 白井 俊 2020 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』ミネルヴァ書房
- 鳥谷真佐子・阿兄雄之・野口淳 2024 「対話型ワークショップにより博物館価値を発見・評価するフレームワークの開発」『The KeMCo Review』02
- 那須正裕 2021 『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社
- 日本博物館協会 2003 『博物館の望ましい姿—市民とともに創る新時代博物館—博物館運営の活性化・効率化に資する評価の在り方に関する調査研究委員会報告書』
- 松田陽・岡村勝行 2012 『入門パブリック・アーケオロジー』同成社

参考資料1 高倉による音楽づくりに関する資料

春日部市郷土資料館 音楽づくり「縄文土器で音楽をつくろう」のアイデア

筑波大学附属小学校 高倉弘光

＜小泉文夫先生の講義から、音楽の起源について考える＞

すべて仮説であるが……

1. 言語起源説（声、言葉が音楽の起源となっているのではないか）

- ・ かけ声
- ・ 会話とはちがう特徴
- ・ 祝詞（のりと）

2. 信号起源説（遠くの人に何かを知らせるために音を出した）

- ・ 遠くに知らせる
- ・ お寺の鐘（かね）なども
- ・ 軍隊のラッパ
- ・ 豆腐屋さんのラッパ

3. 労働起源説（仕事のための歌、音楽→拍子の出現）

- ・ 酒造り
- ・ 線路の保線作業
- ・ 井戸水を組み上げる歌（牛を追う歌）
- ・ 土を運ぶ歌（音頭一同形式）

4. 性衝動起源説

- ・ 愛を叫ぶ歌が起源であるという説（現在のオペラ、ポピュラーも同様）
- ・ 起源として位置づけるには無理があるか？

5. 呪術起源説（おまじないなど）

- ・ 病気の治癒、天候などをおまじないで祈る
- ・ 何を言っているのかわからないような、特別な声の出し方→歌となる

＜基本形＞ （リレーする、重ねる、真似する）

- ① 土器や道具などの特徴を生かした音を見つける。

◎ ▲ ◆ □ など

- ② 上で見つけた音でリズムを一人一人つくって、それをリレー形式で鳴らす。

◎→▲→◆→□ など

- ③ 一人一人がつくったリズムをそれぞれ真似してみる。

A	◎		▲		◆		□
B	◎	▲			◆		□
C	◎		▲		◆		□
D	◎		▲		◆		□

- ④ 一人一人がつくったリズムを重ねてみる。

A ◎ ◎ ◎ ◎ ◎
 B ▲ ▲ ▲ ▲
 C ◆ ◆ ◆
 D □ □ など

＜起源説を生かしたアイディア＞

- ① 音頭一同形式で考えてみる。

・何かの「かけ声」「祈り」「願い」「祝い」（例：「あ～～～、暑い毎日。冷たいもの飲みたいなあ」）などを、リーダーがうたったり、叫んだり、唱えたりして、その後にみんなで決めたリズムを打つ。

そして次の人がまた「かけ声」「祈り」「願い」「祝い」をやり、その後にみんなで決めたリズムを打つ。これを繰り返すと、ロンド形式になる。

- ② 音頭一同形式に、信号起源説を加えて考えてみる。

＜その他のアイディア＞

- ① 土器の形状を生かした音やリズムなどを元に、真似したり、重ねたりする。

- ② 表したい音楽のイメージを決めてから、音楽を構想する。（海の様子、嵐の様子、獲物が獲れた喜び、赤ちゃんが生まれた喜び、祈り……など）

参考資料2 高倉による音楽づくりワークショップ

高 倉：みなさん、こんにちは。私は高倉と言います。小学校の先生です。小学校で音楽を教えているの。今日はみんなで縄文土器のお勉強をしたでしょう。あの縄文土器の音楽をつくろうという、遊びをしてみたいのね。

高倉先生も、今日、縄文のお話を資料館の方や中村先生のお話を聞いて、「へえ～」と思ったことがいっぱいあったの。例えばね、縄文時代って、今よりずっと昔だったじゃない。紙（大型年表）に、ざあーとあったじゃない。あんな昔で、下で見たようなおうち（郷土資料館館内の竪穴式住居）に暮らしていたわけだ。

電気もないじゃない、だから YOASOBI（＊日本の音楽ユニット）とか聴けないじゃない。みんな好きな音楽ってある？好きで聴いている音楽ってある？教えてくれる？

参加者：♪ありがとうの花

高 倉：ありがとうって言ったら（1フレーズ歌う）、ああいうの、好きだよね。

あの時代は真っ暗なところで、ピアノもない、テレビもない、ラジオもない。どうやって遊んでいたのでしょうか？ はい、どうぞ。

参加者：（手を挙げて）音楽。

高 倉：音楽？どうやって遊びをしたらうね？

参加者：貝とかで音を鳴らしていた。

高 倉：貝とかで音を鳴らしていたのかもしれないよね。

高倉先生もそう思う。だから、ここに、いっぱい昔にあったようなものがあるので、どんなことをして遊んでいたのかなというのを、みんなで想像してみませんか。

では、みんなまわり（音素材が並んでいる場所）に集まってきてください。

高 倉：今日は土器の音楽をつくろうって、みんなが土器のおもしろいところとか書いてくれたけど、「ザラザラしている」（付箋紙にコメント記入）って、書いてくれた人がいたよ。

例えば先生だったら、これ（2枚の貝を手取る）ザラザラしているっぽくない？鳴らしてみていい？例えばだよ。（2枚の貝で音を出し見本を示す）なんかザラザラしている音がするでしょう。これもなんか遊べそうだね。みんな持ってみる？これ（貝）。はい、どうぞ。

参加者：（手に貝を持ち、自由に音を出す。）

高 倉：これ、こういうふうにもできるんだ。（参加児童の奏法を見ながら）

じゃあ、先生の真似っこしてみてよ。いい？

先生が「ハイ」と言ったら真似っこするんだよ。

高 倉：♪♪ハイ。（2枚の貝でリズムを刻む）

参加者：（高倉のリズムや奏法を貝を使って真似る。）

高 倉：いいね。

高 倉：2枚の貝で、いろいろな奏法で音をだす

参加者：（高倉のリズムや奏法を貝を使って真似る。）

高 倉：次、難しいぞ。

参加者：（高倉のリズムや奏法を貝を使って真似る。）

高 倉：♪♪♪♪・（貝を擦る）って、遊んだかもしれないね。

だいたい、みんな、「ママ～」という言葉を使うでしょう。

どうやって覚えた？ 赤ちゃんの頃？ 覚えている人？

参加者：（笑い）

高 倉：覚えているわけないね。

高 倉：たぶん、「ママ～」って言ったら、みんなが「ママ～」って返してくれたかも。

だから、今みたいに、（貝を擦る）音を出したかも。

参加者：（貝で真似をする。）

高 倉：そう、そうやって、音楽って、1人がやったことをみんなで真似をするということがあったかもしれない。

もう1回真似してね。（いろいろな音の出し方やテンポを遅くしたりする。）

参加者：（高倉の奏法やリズムを真似する。）

高 倉：ゆっくり。（高倉が示す）

参加者：（高倉の奏法やリズムを真似する。）

高 倉：こうやって遊んだかもしれないな。

次に行こうか。

これ、な～んだ？（サヌカイトが置いてある場所に移動する）

これ、な～んだ。石だね。たぶん、こういう石を磨いたら、こういう石になったんじゃない。石って、実は割れるんです。割れるから、そっと叩いてね。

もしかしたら、こういうツノでやさしく叩いてね。どうやって音楽が始まったか
という、「お～い、ご飯できたぞ！」って、♪♪」（サヌカイトをシカ角で叩く）
って、やったかもしれない。

高 倉：さっきの貝の音と、この音（サヌカイト）って何か違う？同じ？

参加者：響いている。

高 倉：響いているね。さっきの貝でリズム、ジャカジャカジャ（貝の♪♪♪のリズムに
対してシカ角でサヌカイトを1回♪と叩いて呼応する）と、なんか石がお話して
いるように、遊んでいたかもしれないね。

高 倉：気を付けてほしいのは強く叩くと割れます。割れるから優しく叩いた方がいい音
が出るみたい。ちょっと1回ずつやさしく叩いてごらん。どうぞ、やさしく。叩
くものは骨でもいいし、石同士でもいいよ。

参加者：（サヌカイトを自由に叩く）

高 倉：（参加者の音を聞きながら）そういう音が鳴るね。あんまり延びない音もする。
いいよ、鳴らしてごらん。固いバチで鳴らした方がいい音がするかもしれない。あ、
うまい、いい音している。堅いバチで鳴らした方が鳴るかもしれない。伸びたでしょう。

高 倉：いいね、これも使えるかもしれないなあと思うかもしれないよ。

OK、では次のコーナーに行ってみましょう。

参加者：次のコーナー、どこ？

高 倉：どこだろうな？ここにしようか。（大きなヒョウタンの回りに移動する）

参加者：（ヒョウタンのなかに入れたダイズやアズキを触りはじめる。）

高 倉：ああ、もうやっているね。もう教えてくれた。お姉ちゃん、何を教えてくれた？

なんか、こういう音、ジャラジャラ系の音。

これなんか、こういう音もするよね（ヒョウタンに豆類や木の実を入れて見本を
見せる）

参加者：（木の実や豆類を触り始める。）

高 倉：あと、こういう音もするね。この中に、いろいろな木の実を入れてみて。

参加者：すごい。

高 倉：すごいね。

今、袋（麻袋）は1つしかないけれど、こうやったらこういう音もでるね。（麻袋
に豆類を入れて振る）こういう入れ物（ヒョウタン）に入れてもいいかもしれ
ないね。例えば、「ザラザラした」（付箋紙に書いたコメント）って書いてくれた人
がいたけれど、こうやったら、ザラザラした音が出るかもしれない。

こういう入れ物に、こういうものを入れてもいいかもしれないね。上手にやれば、
こぼれないようにね。（半分に割ったヒョウタンに豆類を入れて♪♪・・・と振る）

こういう音なるよね。例えばだよ。ずっとこうやっている人(↓↓↓↓・)がいて、さっきのあの石をカーン。

参加者：カーン、カーン、カーン（参加者が高倉の音に合わせてサヌカイトで呼応する）

高 倉：あ、やってくれた。こうやっても音楽になるかもしれないね。ピアノとかなないから、こうやって音楽つくっていたかもしれないよ。

次のコーナーに行ってみましょう。

高 倉：見えますか？これ、何ていうものか、知っていますか？

参加者：ヒョウタン。（大きなヒョウタンと小さなヒョウタン）

高 倉：さっき「つるつるしている」（付箋紙に記入したコメント）って書いている人がいたね。これ、つるつるした音が出るかな？

参加者：（大きなヒョウタンを手にとり、振って音を出す。）

高 倉：（笑い）面白い音がする。これ同士（ヒョウタンとヒョウタンを擦り合わせる）でやっても、こういう音がでるかもしれないね。面白い音が出る。軽く、やさしい音がするかもしれない。あるいは、中になんか種が入っている（大きなヒョウタンをシャカシャカと振って音を出す）かもしれない。上手に叩けば、大きいヒョウタンは、土器の低い音を探そうっていうのにいいかもしれない。（ヒョウタンを手を持ち、手のひらで叩くなど、いろいろな出し方を示す）

参加者：（手のひらでヒョウタンを叩いたり振ったりする。）

高 倉：鳴るね。

参加者：中になんか入っている。

高 倉：中に何が入っているんだろうね。お金が入っていたらいいなあ。

参加者：（笑い）

高 倉：こっちに来るよ。

参加者：（ヨシが置いてある場所に移動する。）

高 倉：これ、どういうふうにするといい音がするかなあと、さっき試してみたんだけどね。実はね、もう教えてしまった方がいいかな……。実はね、叩くより、例えば、こうやってみてもいい音がする。揉む。例えば、これぐらい持って、ここに置いて、何かいい音がするかもしれない。（ヨシを束にして手で揉んだり、束を少し上から落としたりする）。叩いても、もちろん悪くはない。これからツルツルとした音がでるかもしれない。

高 倉：はい、これ何でしょう？ 何のツノでしょう？

参加者：シカ。

高 倉：これなんか使えそうですか？ こうやってもいいし、叩いてもいい音がするかも。
でも何か使えそう。

参加者：（自由に触って音を出す。）

高 倉：この辺にあるのは何ですか？

参加者：イノシシの骨。

高 倉：骨だね、骨は意外と、いい音するよ。（イノシシ骨を叩き合わせて音を出す）
いい音するね。いろんな音が鳴ったんだ。昔もね、いい音が鳴りました。
では、最後に向こうに行きましょう。

参加者：（ブナの丸太、クリ、トチノミの枝や葉の場所へ移動する。）

高 倉：ここにある木の枝とかは、おそらく叩けば音がするよね。葉っぱって、どんな音がするの？ 持つ前にどんな音がしそうか、想像してみよう。

参加者：パサパサした音。

高 倉：パサパサした音、そうだね、ちょっと持ってやってみよう。

参加者：（葉のついた枝を振ってみる。）

高 倉：はい、いいでしょう。

高 倉：では、大人の方も博物館実習生の方も入っていただいて、この広いところで、大きなまるをつくりましょう。

参加者：（中央のスペースに大きな一重の円になる。）

高 倉：昔にあったものって、どんな音がしたのかなって。

これから、みんな各グループで、自分のところで、土器の音楽をつくるんだけど、土器の音楽って、どうやったらいいか、わからないと思うので。音楽ってどういうふうにできているのかなって、簡単にやっていきたいと思います。

それを今、手拍子とか体から出る音でやってみたいと思います。

さっきやったみたいに、「ママ～」って言ったら、「ママ～」って返ってきたね。

それみたいに真似っこしてみます。

高 倉：高倉先生の真似をしてください。ハイと言ったら真似してみてください。

- ①手で♪♪♪ハイと叩く。
- ②手♪、足♪♪と足を加えて音を出す。
- ③手で♪♪♪ハイと叩く。
- ④手の甲を擦りながら♪♪♪♪と叩く。

⑤口を膨らませて手で押して音を出す。

⑥手のひらを擦りながら「♪♪」。

⑦口に手を添え声で呼びかけ「マ～マ」小さな声や高い声で声を出す。

⑧口に手を添え声で呼びかけ「おもしろいね」柔らかい声で。

⑨口に手を添え声で呼びかけ「縄文土器」

⑩声で「おしまい」と言いながら、手を「お！し！まい！」と叩く。

参加者：（高倉の①～⑩の表現の真似をする。）

高 倉：（高倉の真似が終わり）というように、真似してできている音楽って、いっぱいあるのね。例えば、1人、いろいろなモノをもっている。1人はヒョウタンをもっている。1人は枝をもっている。1人は貝殻をもっている。じゃ、1人ずつ私はこんな音を持っていますよと、自己紹介をすることがあるかもしれません。それをちょっとやってみようか。1人1発だけ、体から出る音を回していきたいと思います。例えば、こういう人もいるかもしれないし、こういう人もいるかもしれないし、こういう人もいるかもしれないし。（手を叩く、足で床を叩く、頬を指で押さえる、頭を叩くなど見本を示す）とにかく体から出る音で、何でもいから、1発ずつ自己紹介してみませんか。チョ、チョ、チョという感じだよ。（1人1人の順番を指し示す）最後の人まできたらおしまいだから。

音楽って、はじまりがあって、必ずおしまいがある。高倉先生が最初にやって、お兄さん（博物館実習生）がおしまい。お兄さんの自己紹介が終わったら、みんな「おしまい（！！）」というふうに、3発、手を叩いてください。

わかる、言っていること？

速く回そうが、遅く回そうが自由にします。タタタタといくかもしれないし、タ、タ、タタ、タタタツと、自由にします。いきます。

参加者：（1人が手で1発叩く。）

高 倉：おもしろい。ちょっと待って。同じ手を叩くのでは、こういうのと、こういうのでは違うね。いろいろな音が出るんだ。さあ、みんなどんな音出すかな？
もう1回、先生からいきます。

参加者：1人ずつ、手や体から音を出していく。

高 倉：（参加者の出した音に対して、いいですねなど賞賛したりする）

参加者：（最後のお兄さんが1発叩いたら、「おしまい」と3発叩く。）

高 倉：これで1発の音楽ができたね。あそこにあるものものでも、できるかもしれないね。

じゃあ、今度は同じ1人1発になるんだけど、その人がやったのを、みんなで真似してみよう。

例えば、高倉先生が、こうやって（足を前に出して強く踏み込んで1発音を出す）音を出したら、みんなも真似してください。

参加者：（高倉の真似をして、足を前に踏み込んで音を出す。）

高 倉：そうです。さっきと同じでなくていいから。違うところでいいから。真似っこでつくる音楽。お兄さんがやって、真似っこしたら、おしまい（手を↓↓と叩く）。いきますよ。真似してね。

高 倉：高くジャンプして音を出す。

参加者：（高倉のジャンプを真似る。）

＊以後、参加者の表現を真似て一周し、最後の人の表現が終わったら、手拍子で↓↓↓とおしまいと叩き、終わる。

高 倉：こうやって真似っこの音楽ができるかもしれません。それで今日は、それぞれが選んだ土器のいいところみたいところを音楽にしてみようといった時に、じゃあ、どうするかっていう話になるよね。それ、どうする？ 例えばだよ、縄で模様をつくったじゃない。ゴロゴロゴロってつけたかもしれないよね。じゃ、ゴロゴロゴロっていうのを誰かがやる。ずっとこうやっていてもいいかもしれないね。ゴロゴロって。

高 倉：では、こっちに来てもらってもいいですか？

参加者：（2班の土器が置いてある方に移動する。）

高 倉：例えば、ここに（土器を見ながら）ゴロゴロでつけた模様がいっぱいあるの。

これを誰か1人が楽器というか、ツノでゴロゴロゴロって……………。

1人はここをやってもいいかもしれない。ゴロゴロゴロ、ピッ、ゴロゴロゴロ、ピッ。ピッじゃないね。なんだ？

参加者：カーン。

高 倉：カーンか。いいよ。

ゴロゴロゴロ、ゴロゴロゴロ、カーン、カーン。ゴロゴロゴロ、ゴロゴロゴロ、カーン、カーンとか、自分で、今ここをやっているんだぞというのを想像しながら、音楽をつくることもできるかもしれない。重ねるっていうのも。

ゴロゴロゴロ、カーン、カーン。これをずっとやってもいいし、お話みたいにしてもいいし。わかる？ 繰り返してみたり、お話し合わせてみたり、重ねて

みたり、遊んでみて、いろいろ遊んでみてください。

みんなが同じような材料を持っても構わないし、グループの中で、違うものをカンカンというというやつと、ガラガラ系を合わせてもいいし。色々試してみてもいいしね。でも、そんなに時間がないみたい。だいたい10分ぐらいで、なんとなく遊んでみます。それぞれのチームに大人の人がいるから相談しながらでもいいよ。高倉先生も回って歩くから。最後は終わったなあというのを「おしまい」でもいいし、最後静かに終わってもいいし、みんなで終わりでもいいよ。たくさん言ってしまったけれど、なんとなくわかる？

はい、では4時過ぎぐらいまで遊んでみましょう。

約 20 分 記録作成 早川